# TOTO 通信

2019年 春号

Toward a Creative Architectural Scene

Special Feature

Designing Floor Plans for Visitors

特集

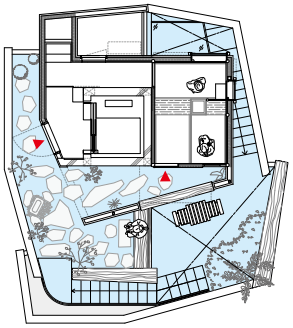
## 客を招く間取り

# TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 521
Spring 2019

家の間取りは多様化している。特徴的な間取りが次々と現れ、人の生き方や暮らし方の多様さを反映しているかのようだ。一方で住まいの歴史を振り返ると、間取りには基本形があり、とりわけ座敷や応接間などの接客のスペースは、住宅の要でもあった。その接客のスペースが、あまり見られなくなってきている。それが現代のライフスタイルの潮流だとしても、まだ絶えたわけではない。これから先、家を開き、社会との接点を住宅に求めるならば、接客文化から得られるヒントもあるにちがいない。では、接客のためには、どのような建築をつくればよいのか。座敷や応接間などの基本形は大切だが、それだけではない。新しい試みも含めて、客を招く間取りを特集する。

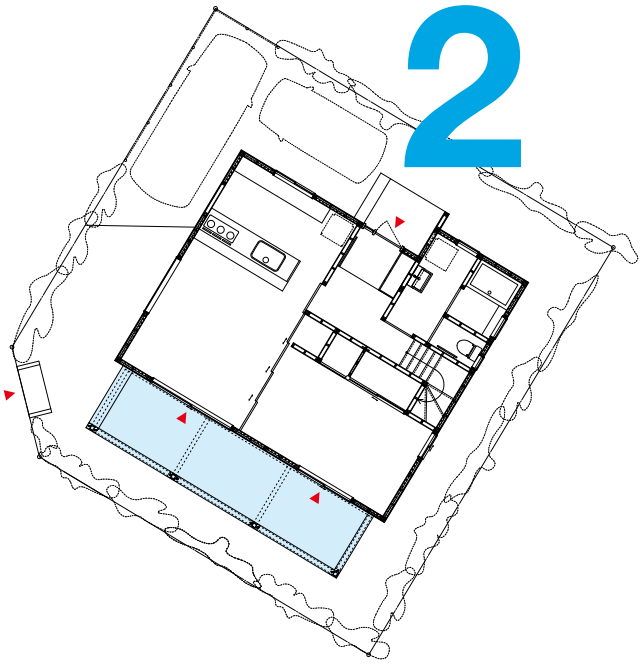
Case Study 1



house h

大西麻貴＋百田有希

Case Study 2



あきるのシルバーハウス

能作淳平

インタビュー

忘れられた客間——接客の間取りを振り返る　内田青藏　4

ケーススタディ1

ぐるぐるまわって、屋上に茶室　「house h」設計／大西麻貴＋百田有希　10

ケーススタディ2

裏庭が、客を招く入口になった　「あきるのシルバーハウス」設計／能作淳平　18

ケーススタディ3

個人のスペースをしぼり、来客のために町家を開放　「新釜座町の町家」設計／奥谷繁礼　26

ケーススタディ4

1階は、まるまる客間でもある　「街の家」設計／増田信吾＋大坪克亘　34

シリーズ

旅のバスルーム107　ド&コ ホテル ウィーン（オーストリア・ウィーン）文・スケッチ／浦 一也　40

現代住宅併走43　「O邸」文／藤森照信 設計／吉阪隆正　42

最新水まわり物語49　渋谷ストリーム　48

地域に生きる会社78　伊藤建設　54

TOTOギャラリー・間で展覧会をします　中山英之展, and then　56

News File　TOTO News, Cera Trading News, Books　58

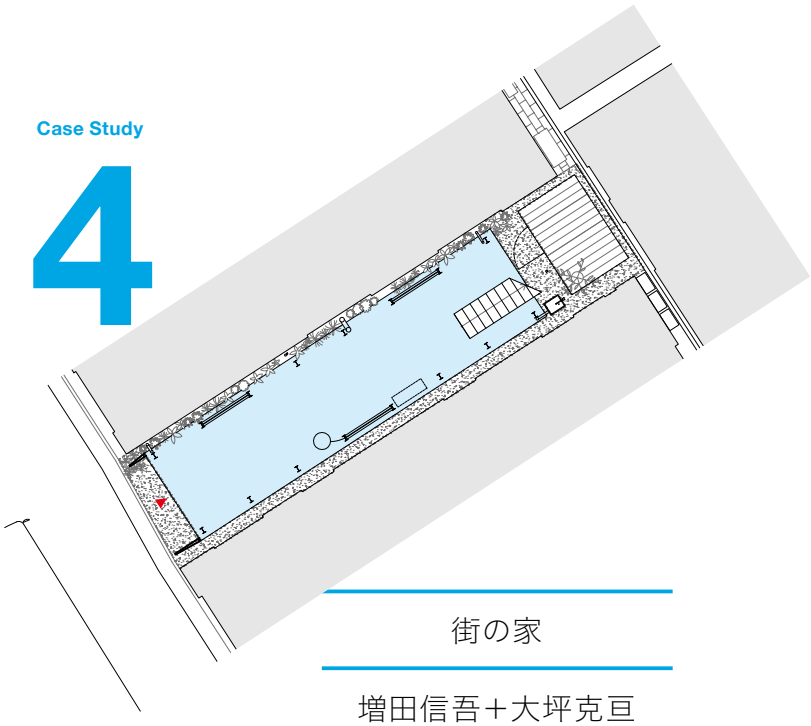
『TOTO通信』のバックナンバーをインターネットでご覧いただけます。→ https://jp.toto.com/tsushin

表紙／「あきるのシルバーハウス」の土間。　表紙撮影／桑田瑞穂
編集制作／伏見編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所　印刷／ゼネラルアサヒ

# 特集／客を招く間取り

Special Feature
Designing Floor Plans for Visitors

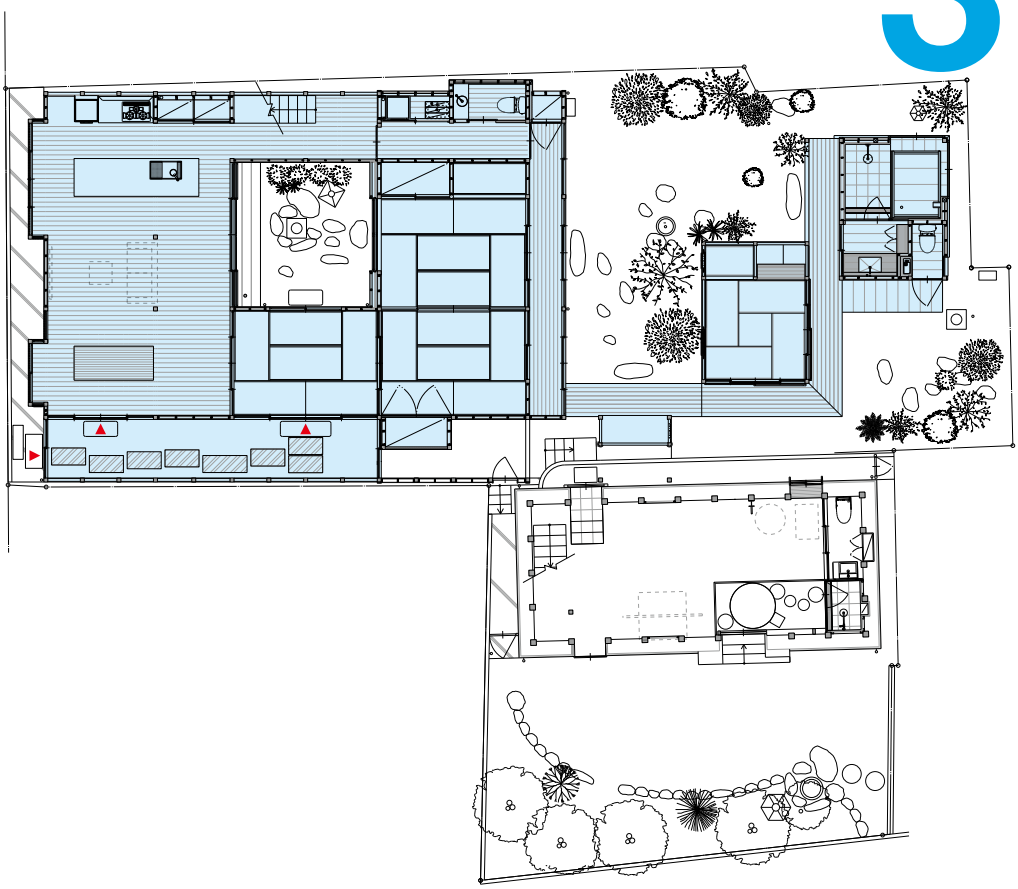
Case Study
## 4



街の家

増田信吾＋大坪克亘

Case Study
## 3



N 0 1 2m 1/200

接客のためのスペース

出入口

新釜座町の町家

奥谷繁礼

インタビュー

# 忘れられた客間
# 接客の間取りを振り返る

建築史家 内田青藏

聞き手・まとめ 大井隆弘

写真／山内秀鬼

Ohi Takahiro

床の間のある座敷、
洋風の応接間、
そういった
客間のある住宅は
少なく
なってきている。
それらはなぜ
なくなっていったのか。
接客の間取りの
変遷を、
建築史家の
内田青藏氏に聞いた。

## かつては客を招く場所が重視されていた

**大井**　日本の伝統的な住まいを思い起こせば、床の間のある座敷や格式の高い玄関など、接客のためのさまざまな工夫がありました。まずは、その原点ともいえる、江戸時代以前の武士の住まいにおける接客について、お聞かせください。

**内田**　みなさんが自宅に誰かを招く場面を考えてみてください。たとえば会社の人であれば、上司よりも部下を招くことが多いと思います。ところが、武士の社会は逆です。忠誠や上下関係の絆の確認のため、上司が部下の住まいをしばしば訪れました。失礼があってはいけないので、部下は最大限のもてなしをしたのです。そのため、間取りも接客を重視したものでした。

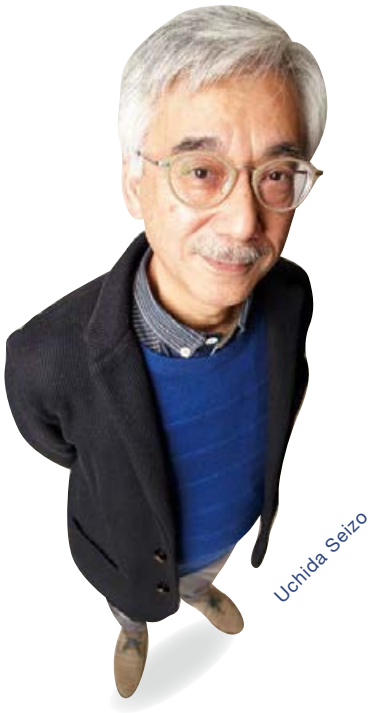
環境のよい南側には主人や客が使用する客間座敷、家族団らんの場や台所は北側という方位に対応した間取りが出現するのは、武家住宅でも幕末以降でした。一方、伝統的な住まいには、客向けの「ハレ」と家族向けの「ケ」の場とのあいだに明確な区分がありました。また、ハレの場だけ見ても、玄関を起点とした「手前」と「奥」の関係があり、最も格式の高い座敷は玄関から見て一番奥にあることが多いようです。玄関で出迎えをし、客間へと客人を導いたわけです。

**大井**　そうした構成は民家の間取りにもあてはまりますね。たとえば、川崎市立日本民家園に移築されている「旧作田家住宅」（江戸時代中期／平面図6ページ）は九十九里の鰯漁で網元を務めた大きな家で、土間への出入口とは別に「ゲンカン」があり、最も格式の高い「オク」へと続きます。縁側の先には客用の「フロバ」と「ベンジョ」があり、このエリアで接客が完結します。

あるいは町家でも、庭側に座敷が配置されているものをよく見かけます。「旧松下家住宅」（江戸時代末期／平面図6ページ）は、金沢のはずれで種物屋や茶店を営んだ家で、規模は大きくありませんが、一番奥の「ざしき」には床、棚、付書院が揃い、最も格式の高い部屋になっています。この「ざしき」は19世紀後半の改造だそうです。

**内田**　そうですね。とくに藩の役人を迎えるような上流層の民家では、この構成がよく見られますし、明治時代に入ってもすぐにはくずれません。

明治中期頃の状況がよくわかる例として、「森鷗外・夏目漱石住宅」（通称「ネコの家」、1887年頃／平面図7ページ）を紹介します。間取りを見ると、まず主人や客人が使う「玄関」があり、その北側の「炊事場」には家族や使用人の使う勝手口があります。


Uchida Seizo

うちだ・せいぞう／1953年秋田県生まれ。75年神奈川大学工学部建築学科卒業後、東京工業大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程などを経て、95年文化女子大学家政学部（現造形学部）助教授。97年同大学教授。2006年埼玉大学教育学部助教授。07年同大学教授、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科教授を兼任。09年より神奈川大学工学部建築学科教授。博士（工学）。主著に『日本の近代住宅』（鹿島出版会、1992年）、『間取り」で楽しむ住宅読本』（光文社、2005年）など。

「玄関」の南側は主人の「書斎」で、その先は南側が続間座敷、北側が「使用人室」や「茶の間」です。「書斎」には主人の親しい友人も招かれましたから、南側に客を招く「ハレ」の場が配置されているんです。

さらに一番奥の南側は主人の「寝室」で、北側の「六畳」は子どもの寝室になっています。要するに、環境のよい南側を主人や客が使っている。家はまさに主人とその客のものだったわけですね。

## 家族のための間取りへと、徐々に変化していく

**内田**　ところが大正時代に入る1910年代になると、住まいが家族のものだと認識されはじめます。接客本位から家族本位へと変わりはじめるのです。北側にあった「茶の間」などの家族の部屋を南側に配置する例が出てくる。その際、客間座敷が奥にあると、お客さんと家族の動線が混乱しますから、次第に客間は玄関側へと移動してきます。時代が後になりますが、1934年竣工の「佐々木邸（旧同潤会江古田分譲住宅）」（平面図9ページ）や「小林古径邸」（設計：吉田五十八／平面図8ページ）の間取りと比べてみてください。

**大井**　確かにそのとおりですね。「佐々木邸」は大学教授の家でしたが、「客間」が手前で「茶の間」が奥にあります。「洋間」と合わせて、接客のスペースが住まいの手前で完結しているようです。「小林古径邸」は有名な日本画家の家ですが、「居間」や「茶ノ間」が奥にあり、「客間」は「書斎」を通りこして一番手前にきています。

**内田**　ちなみに、日本では同じく1910年代以降に2階建てが一般化するといわれています。なかには1階を家族の部屋に譲り、客間を2階へ上げる例も登場してくる。2階からのダイナミックな眺望で客をもてなすわけです。客間は、奥から手前へという流れに加え、下から上へという流れもあったのです。さきほど江戸期の民家の話が出ましたが、それまで2階は収納や使用人の部屋に使うことが一般的でした。一方、実際の使い方はわかりませんが、「小林古径邸」は2階にも座敷があり、客の動線もスムーズですね。

**大井**　「小林古径邸」や「佐々木邸」を見ると、客の使用できるトイレの位置も変わってきたようです。

**内田**　「旧作田家住宅」や「ネコの家」では、縁側の先にトイレがありますが、「小林古径邸」では玄関脇に配置されています。これなら、プライベートな家族の部屋を通らずとも、トイレに行けますね。もちろん、においや衛生の問題があるので、浄化槽や下水道、水洗化といった技術と一緒に考える必要がありますが、その改良とともに、配置は自由になっていったのです。

## 洋風の応接間やホールも取り入れていた

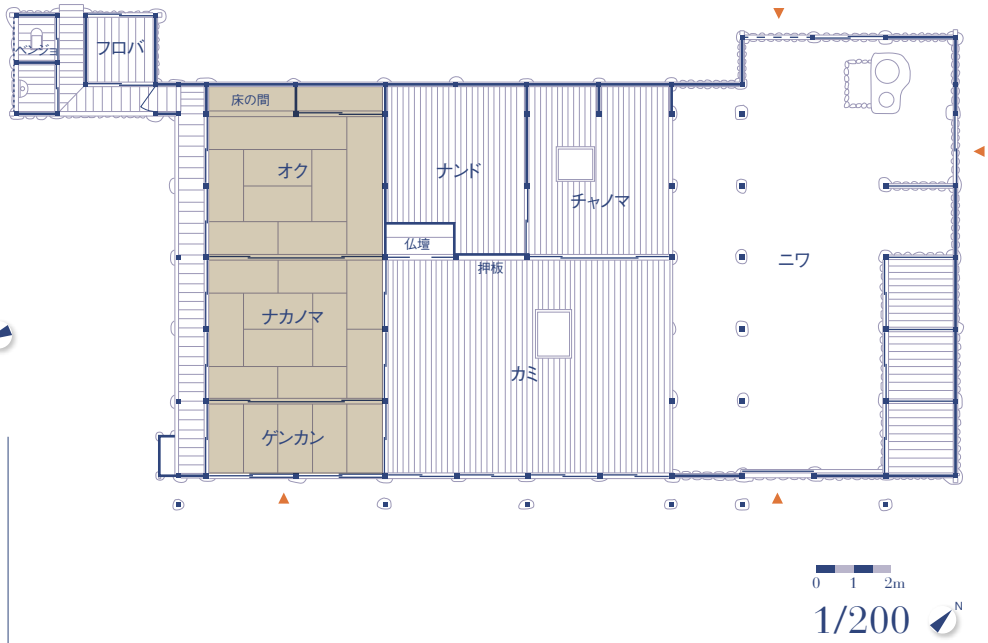
**大井**　ところで、「佐々木邸」では玄関脇の部屋が「洋間」となっています。ここには、ソファやテーブル、椅子が置かれ、応接の場として使用されていたようです。大正時代以降、中流層の住宅でも玄関脇に洋風応接間を設けた事例が散見されるようになります。

**内田**　その傾向を知るには、明治20年代から流行しはじめる「和洋館並列型住宅」に触れる必要があります。明治時代に入って天皇は洋装を採用しましたが、その行幸に際して、お迎えをする人人が洋装にふさわしい接客の場として、洋館を建設していきました。これが生活の場である従来の和館に並んで建てられたことから、「和洋館並列型住宅」と呼ばれています。東京・湯島にある「旧岩崎邸」（1896年）などはその形式の代表例です。やがて、洋館がある種のステータスになり、規模を縮小しながら中流層の住宅へも広まる。今見ると木に竹を接いだようで違和感があります

## 旧作田家住宅

千葉県山武郡九十九里町作田に所在していた漁師の網元の家。二棟の分棟になっており、「ニワ」という土間部分が18世紀後期、「チャノマ」「オク」などの主屋部分が17世紀後期の建造だといわれている。現在は、川崎市立日本民家園に移築されている。

土間の反対側の上手には、接客のための座敷（オク）がある。畳敷の部屋が続き、背後に水まわりが付属するなど、上層民家の接客部分を伝える建築。



## 旧松下家住宅

石川県金沢市旧泉新町に所在していた茶店を兼ねた町家。近郷の農民相手に種物商も営んでいた。江戸時代末期に建造されたものだといわれている。現在は、金沢湯涌江戸村に移築されている。

地方色豊かな造りも見られるが、表に店「みせのま」、奥に座敷「ざしき」を配し、通り土間「通りにわ」でつなげるところなど、典型的な町家の間取りになっている。

■ 接客のためのスペース　▲ 出入口

が、この違和感こそ重要だったのです。

もちろん、この頃の男性はすでに洋装を取り入れていましたから、主人の使用する部屋が洋風になった、という意味もあるでしょう。あるいは明治20年代になると海外経験のある人が書斎だけ洋室にする例もぽつぽつ出てくる。これらの傾向も踏まえつつ、「和洋館並列型住宅」の行く末にあるのが、「佐々木邸」の間取りですね。

**大井**　そもそも日本で洋館が建設されるようになったのは幕末ですが、日本の伝統的な住まいとは玄関のつくり方が違いました。日本人は玄関で靴を脱ぎますが、欧米人は基本的に靴のままです。たとえば、神戸の「旧ハッサム家住宅」（1902年／平面図8ページ）を見ると、広い「ベランダ」があり、縦長の大きな「ホール」に靴のまま入ります。

**内田**　「旧ハッサム家住宅」は、インド系イギリス商人の住まいですね。玄関ホールについて考える際に大切なことは、単なる入口ではなくて、人が滞在する場所だということです。訪れた客の出迎えはもちろん、応接室から食堂へ移る際に待機してもらい、準備ができたら主人がまた案内する。「旧ハッサム家住宅」ではないのですが、ほかの洋館の「ホール」では、ソファを造り付けたり、椅子を置いたりする例もあります。日本にあるとはいえ、イギリス人の住まいですから、イギリス式の接客文化が反映されている。ただ、この間取りにあるような玄関ホールは、日本人の住む中小規模の洋館ではあまり一般化しませんでした。単純な移動のための廊下だと思われたのか、面積が小さくなっていきます。

## 間取りの合理化を選択し、接客を追い出す

**大井**　玄関ホールが小さくなっていったのは、合理化の過程ともいえるでしょうか。

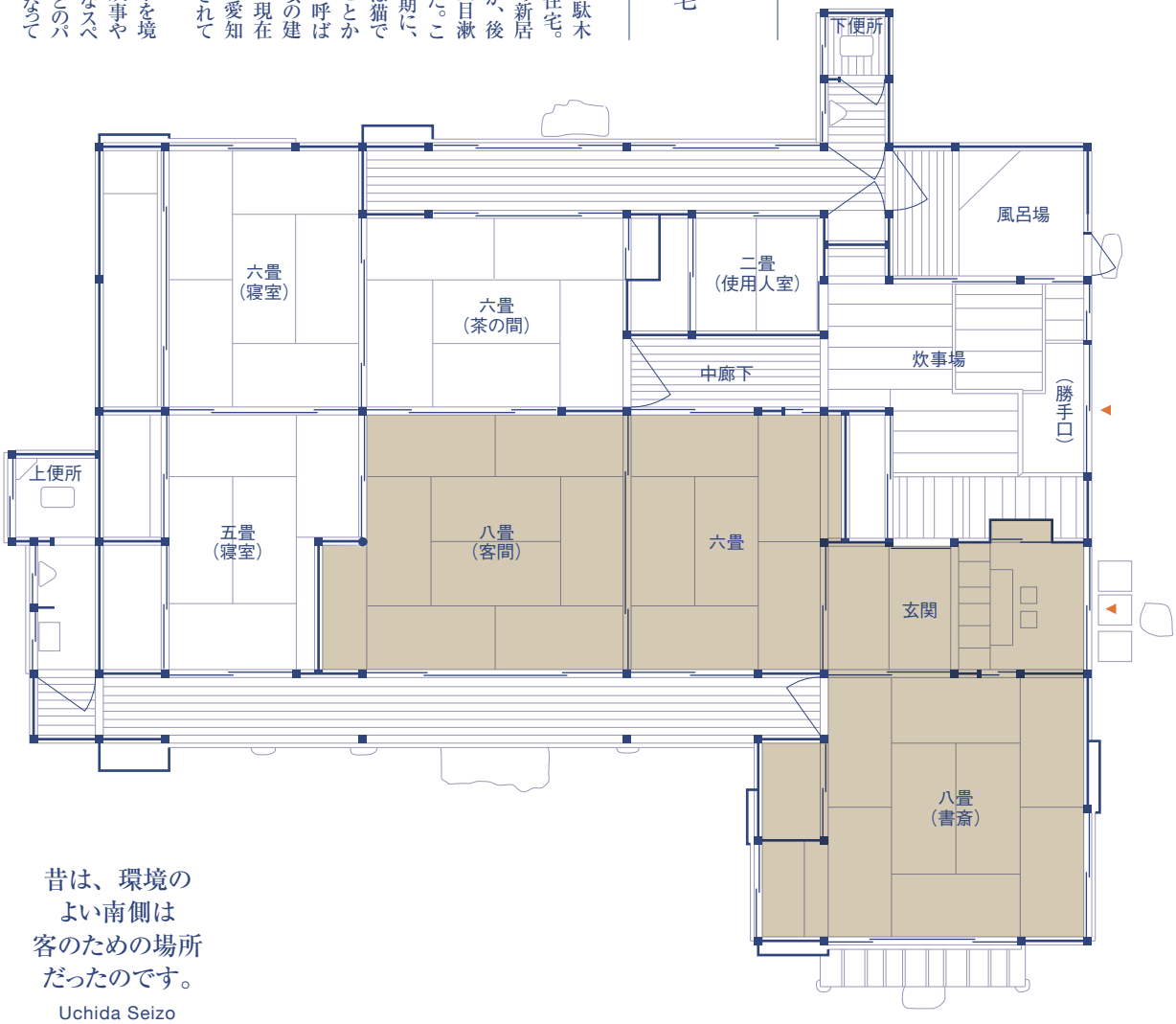
**内田**　そうですね。1910年代になると、都市部の中流層に合理的な生活を求める人々も現れてきます。もともと住まいの出入口には主人や客人が使用する表玄関、家族が使用する内玄関、使用人が使う勝手口という身分に応じた使い分けがありました。小さい住宅では困難ですが、玄

# 森鷗外・夏目漱石住宅

東京都文京区千駄木町に所在していた住宅。医学士・中島襄吉の新居として建てられたが、後に森鷗外、つづいて夏目漱石が借りて住んでいた。この家に住んでいた時期に、夏目漱石が『吾輩は猫である』を刊行したことから、「ネコの家」とも呼ばれる。1887年頃の建造だといわれている。現在は、博物館明治村（愛知県犬山市）に移築されている。

中央にある中廊下を境目として、北側が炊事や食事などの日常的なスペース、南側が客間などのパブリックなスペースになっている。

※括弧内の室名は『吾輩は猫である』から推測したもの。



昔は、環境のよい南側は客のための場所だったのです。

Uchida Seizo

関は格式の表現にも使用されたのです。「旧作田家住宅」の間取りを見るとよくわかりますね。ところが、合理的な生活を求める人人は、身分に応じた出入口の使い分けを批判しましたし、面積の無駄だとすら言いました。

家族が客と同じ玄関を使うようになると、お客さんが来たときに靴が散らかって困りますから、下駄箱もこの頃から設置されるようになります。要するに、実用本位へと舵が切られていく。さきほど見た「小林古径邸」にも下駄箱がありますね。

また、戸締まりを厳重にしようとした結果、建具の種類も引き戸から扉へと変わっていきます。本来、本格的な洋館、たとえば「旧ハッサム家住宅」では扉は内開きなのですが、小さな玄関では靴がじゃまになるので外開きに変わっていく、という流れもあるんです。ある種の合理化の影響ともいえると思います。現在ではほとんどの玄関が外開きですね。これは接客を考えるうえでは、きわめて重要な変化です。内開きは、人を招き入れる行為の象徴ですから。

**大井**　食堂や台所も合理化されていきますね。たとえば、台所作業の合理化も、やはり1910年代から注目されてきたようです。

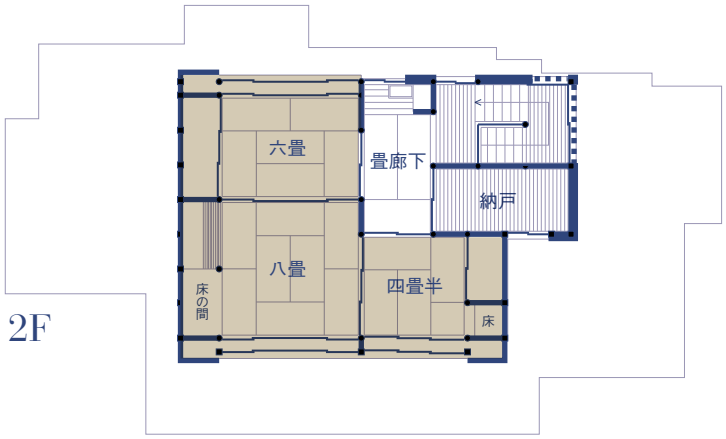
**内田**　さきほどイギリスの接客文化について触れましたが、イギリス系の住宅を見ていくと調理の場と接客の場を離す傾向があったようです。食事のときににおいや音が食堂へ伝わってはまずい。「旧ハッサム家住宅」も「厨房」は外にありますね。

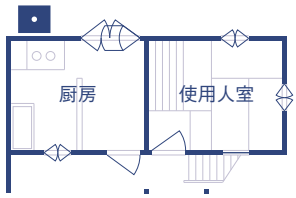
ところが、住宅の合理化という点では、日本はアメリカの影響を強く受けています。1910年代以降、都市中間層の住まいとして中小規模の洋館が建設されていきますが、その多くがバンガローなどのアメリカ系の住宅をモデルにしていました。そこでは、料理を運ぶ手間が省かれたのです。日本人としては海外の文化（イギリス）よりも合理化の思想（アメリカ）のほうが理解しやすかったのでしょう。結果的に、食事の場と台所が隣同士に配置され、ハッチも取り付けるようになります。部屋の移動なしで料理を出し入れできるハッチは合理化の象徴ですね。もちろんイギリスにもハッチはあります。しかし、食堂と台所のあいだではなく、配膳室と台所のあいだに多いようです。台所と食堂のあいだの壁にハッチという穴があく。その穴が大きくなれば、やがては同じ部

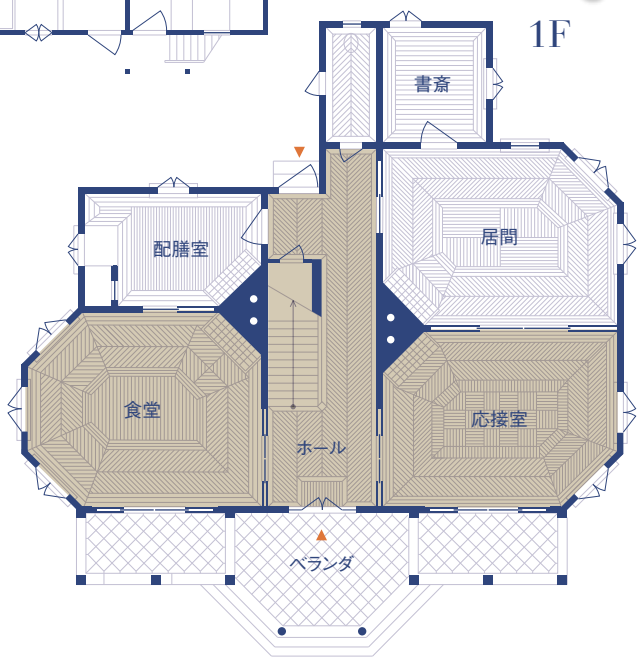
## 小林古径邸

東京都大田区南馬込にあった日本画家・小林古径の住宅。設計は吉田五十八。1934年の竣工で、現在は、小林古径記念美術館（新潟県上越市）に移築されている。

土間や玄関側には、客間、書斎、便所などが配され、接客行為が東側で完結するような間取りになっている。廊下部分も接客スペースと日常のスペースとが建具で仕切られ、区分けされている。2階への階段が東側にあり、2階の座敷を接客用に使うこともできる間取り。




## 旧ハッサム家住宅

兵庫県神戸市中央区北野町の高台に所在していたイギリス人、K・ハッサムの住宅。設計は同じくイギリス人のA・N・ハンセル。外国人居留地の住宅であり、日本では初期の洋館のひとつ。1902年の建造。現在は、相楽園（兵庫県神戸市中央区中山手通）に移築されている。

イギリスの住宅の系譜を引き継いでおり、大きな玄関ホールがあるのが特徴。ホールが間取りの中心にあり、客の応対の場、あるいは待合にもなる。2階には寝室や浴室などのプライベートなスペースがある。

屋になってダイニング・キッチンになる。ひどい言い方ですが（笑）。

**大井**　確かに、「佐々木邸」にはハッチこそありませんが「台所」と「茶の間」が密接な関係をつくっていますし、「小林古径邸」は「台所」と廊下のあいだにハッチがついています。

日本においてダイニング・キッチンは、浜口ミホなどの建築家が戦前から採用していますが、一般化するのは戦後に住宅公団が採用してからといわれています。いかに狭い面積で暮らしを成立させるか、という意味合いが強かったと思います。

戦後になると、洋風応接間のスペースも子ども部屋にとってかわられたりして、いよいよ接客のための部屋が消えていく。浜口ミホが手がけた「栗田邸」（現存せず、1950年代前半／平面図9ページ）を例にとると、小さな「玄関」から直接「居間（食堂）」に入り、食卓がそのまま「台所」の調理台になる。いわゆるLDKの間取りです。まだ畳の部屋はありますが、客間ではありません。きっと客も、この「居間（食堂）」で家族の一員のように過ごしたのでしょうね。

**内田**　親密な接客でもない限り、なかなかこの「居間（食堂）」へは入れないでしょう。簡易な応接であれば「玄関」ですませ、それ以外はホテルやレストランでしょうか。

**大井**　当時としては、新鮮な間取りだったと思いますが、今では客を通す場所が居間、つまりリビングしかないというのは、むしろ一般的ですね。

**内田**　住む人にもよるでしょうが、伝統的な住まいがもっていた社会的な機能が追い出され、住まいがどんどん閉じていく。もっというと、その居間・食堂でさえ、夫は帰宅が遅く、子どもは子ども部屋に閉じこもり、誰もいない場所になってきた。戦後の圧倒的な住宅難のなかでは、面積との格闘も重要な意味をもちましたが、はたして今もその延長線上で住まいを考えるべきなのか、大きな疑問ですね。

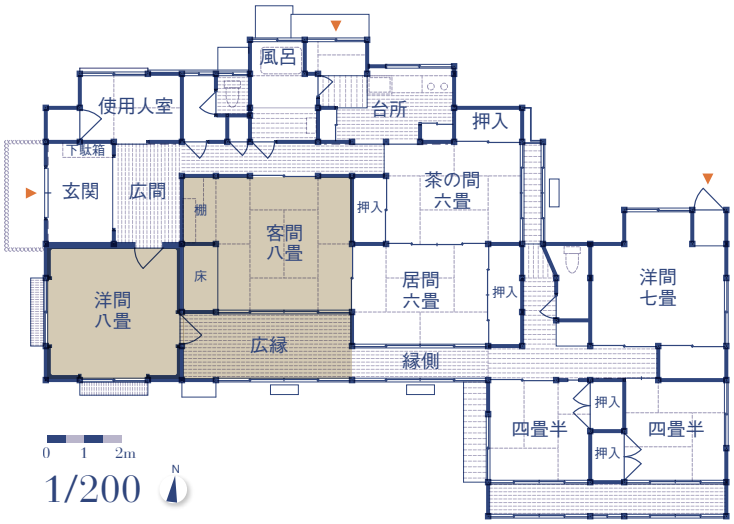
## 再び、客を招くために

**大井**　接客が住まいのなかから追い出されていった影響は多岐におよんでいると思います。家事なども変化したのではないで

## 栗田邸

日本初の女性建築家・浜口ミホが設計した住宅。現存せず、立地は不明。浜口の著作『すみよい住まい』（1953年）のなかで紹介されている。

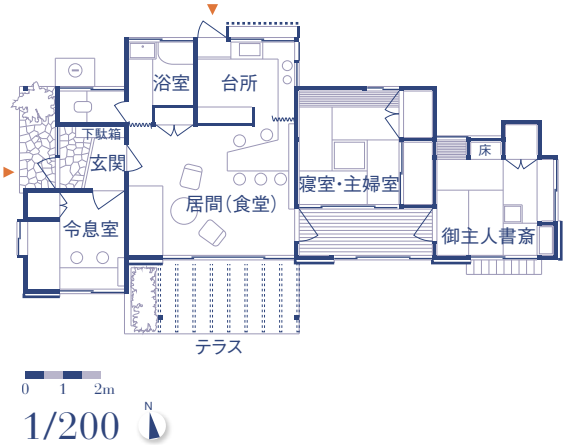
居室よりも格下とみなされる台所のあり方を見直し、食事と炊事の場をひとつに融合することなどを試みた。浜口の考えが、後のLDKへと展開していく。その思想を色濃く反映した間取りで、居間（食堂）と台所がひとつの空間になり、食卓とキッチンカウンターも一体化しているのがわかる。




## 佐々木邸

東京都練馬区小竹町に所在している住宅。関東大震災後に住宅供給を行った同潤会がつくった一戸建ての分譲住宅。江古田の一街区に30戸分譲された住宅のひとつ。1934年の竣工。85年ほどの時を経るなかで、間取りも変化してきたが、現在、当時の復原が進められている。

玄関から入ると、すぐ右手に洋間の応接間がある。全体は和風の木造だが、応接間だけは洋風の内装になっている。南東の四畳半、洋間七畳などの諸室は後の増築。




■ 接客のためのスペース　▲ 出入口

接客が住まいのなかから
追い出されたことで、
人が住む環境は
大きく変わったのですね。

Ohi Takahiro

しょうか。

**内田**　たとえば掃除ですね。今は回数も減り、たまにお客さんが来るときに大掃除をする人も多いと思います。極端な例ですが、その果てにあるのがゴミ屋敷です。あれは完全な個人主義で、接客という行為が消滅しています。私たちはきっと、そこへ近づいていっている。住宅は接客の場から家族の場になった。それを再びもとに戻すことは主張しないし、不可能だと思います。しかし、客を招く行為を再評価していかないと、われわれの住文化は悪いほうへと転がりつづけますよ。

**大井**　おっしゃるとおりで、私の家もお客さんが来る前の日は大掃除です。しかしそのたびに、来客が増えれば環境は変わるぞ、という実感もあります。そのためには、何か客を招くヒントがあるといいのですが。

**内田**　「小林古径邸」や「ネコの家」もそうですが、芸術家や小説家の家が参考になるかもしれません。一日中家で仕事をしている人たちの家です。掃除するかどうかは別として、飽きないようにいろいろ気分を変えられる場を家の中につくっている。普請道楽はお金持ちの話だと思われがちですが、一生に1回だって、最高のものができれば普請道楽です。たとえば、極端な例ですが、家の半分がお風呂だとかね（笑）。冗談半分とはいえ、友人たちはもちろんのこと子どもや孫が遊びに来る頻度が増えそうな気がしませんか。住まいも接客も、やっぱり楽しいものでなければ。

それから、今若い人たちが町家や農家を買ってリノベーションをしています。彼らは伝統回帰というよりも、新鮮な眼差しでそれらを見ている。現代の生活を知った人が、かつての接客文化に根ざした住まいに手を加えて暮らす。そんな問取りにも、再び客を招くための重要なヒントがありそうです。


## 大井隆弘

おおい・たかひろ／1984年東京都生まれ。2006年三重大学工学部建築学科卒業。09年東京藝術大学大学院美術研究科建築学専攻修士課程修了。15年同大学大学院博士課程、同大学教育研究助手を経て、17年より三重大学大学院工学研究科建築学専攻助教。博士（美術）。主著に『日本の名作住宅の問取り図鑑』（エクスナレッジ、15年）など。

東側からの俯瞰。住宅を取り巻くらせん状の階段から、3階のゲストルームや屋上の茶室にアプローチすることができる。

# ぐるぐるまわって、屋上に茶室

Special Feature

# Designing Floor Plans for Visitors

作品　house h

設計　大西麻貴+百田有希

茶室に招かれた客は、緑豊かな露地を経て躙(にじ)り口に至る。そんな豊かなシークエンスは、広い土地があるから許されるのであって、都心の敷地では望めないものなのだろうか。そんなことはない。都心にも、露地を。らせん状に茶室に導かれる立体的な露地が生まれた。

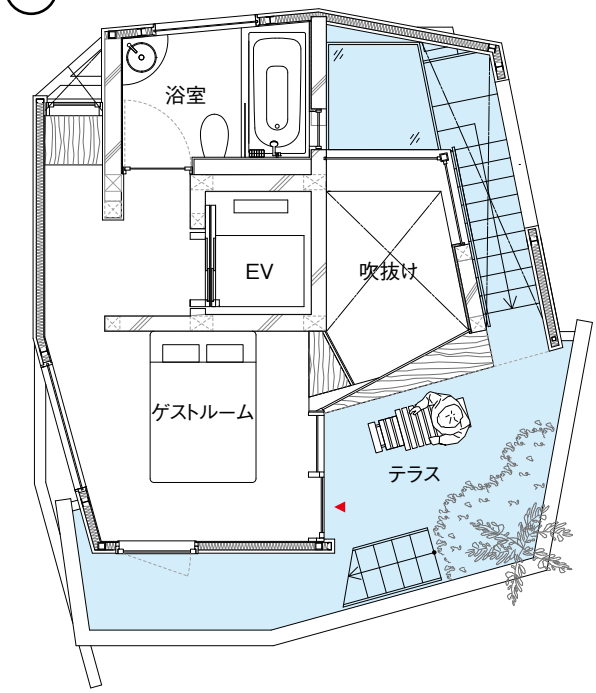
取材・文／杉前政樹　写真／川辺明伸、中村 絵(*印)

# 平面図

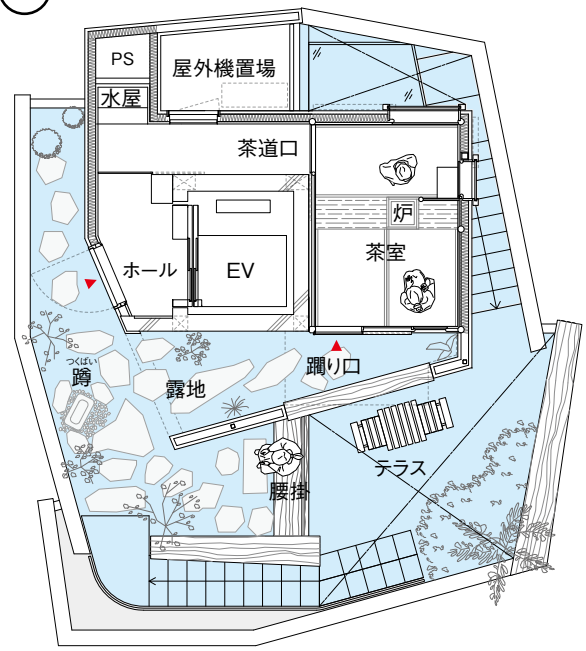
1/100

接客のためのスペース　▲出入口

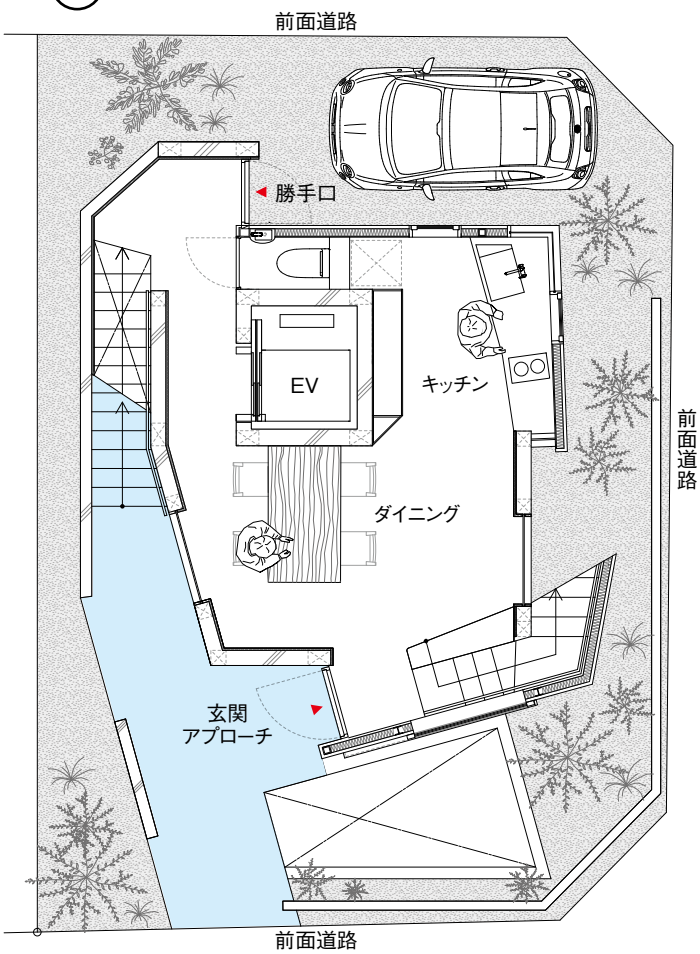
3F




RF




1F



南東側外観。3方向が接道している敷地。1階の南側にはメインの玄関、北側には勝手口がある。

各階へのアプローチが、室内と室外のふたつある間取り。室外では、外のらせん状の経路を通って、各階へ至る。2階の踊り場テラスから書斎やデイベッドコーナー、3階のテラスからゲストルーム、屋上の露地から茶室。室内では、1階と2階は階段でつながっているが、3階、屋上にはエレベータだけでつながっている。茶室の動線を見ると、主人はエレベータから水屋を経て茶道口、客は外階段を上がって露地を経て躙り口に至る。

港区内の地下鉄駅から歩いて数分。大通り沿いのはなやかな高層マンションやオフィスビルから一歩なかに入ると低層の一戸建てが立ち並んでいる。どこかなつかしい風情の残る住宅地の、3方向とも街路に囲まれた敷地に立つ「ｈｏｕｓｅｈ」は、杉板材の外壁と大きな開口部が特徴で、密集した都市にありながら、別荘のコテージのようなさわやかな開放感を感じさせる。

## 玄関が7つある家

「敷地は3方向を道に囲まれているので、もう一方向に街路を引き込んで、家のまわりをぐるりと取り巻きながら最上階まで続く道をつくり、街とプライベートな空間との緩衝帯にしようと考えました」

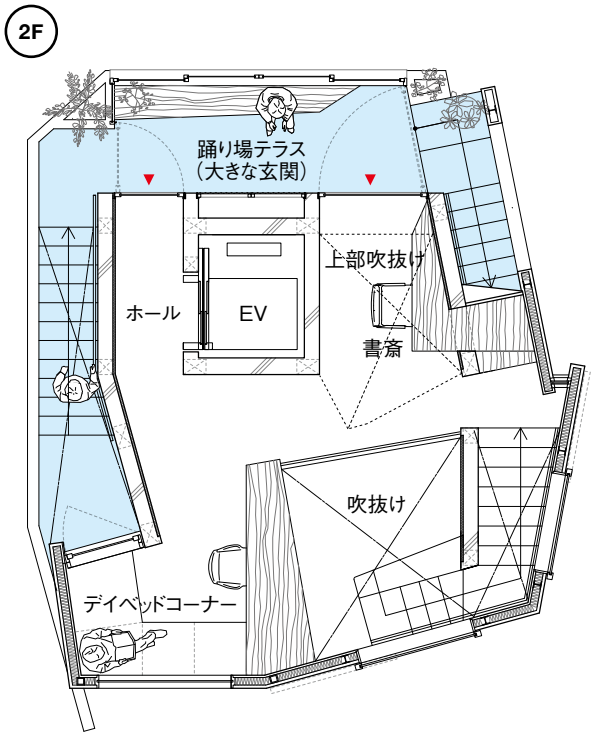
と百田有希さんは言う。道を通じて、この家はじつに多彩なアプローチが可能となっている。1階にはメイン玄関と勝手口、外階段を上って2階の踊り場テラスには2カ所の出入口、さらに3階のゲストルームにひとつ、屋上には茶室の躙り口と勝手口があり、全部で7つの玄関をもつ家ということになる。

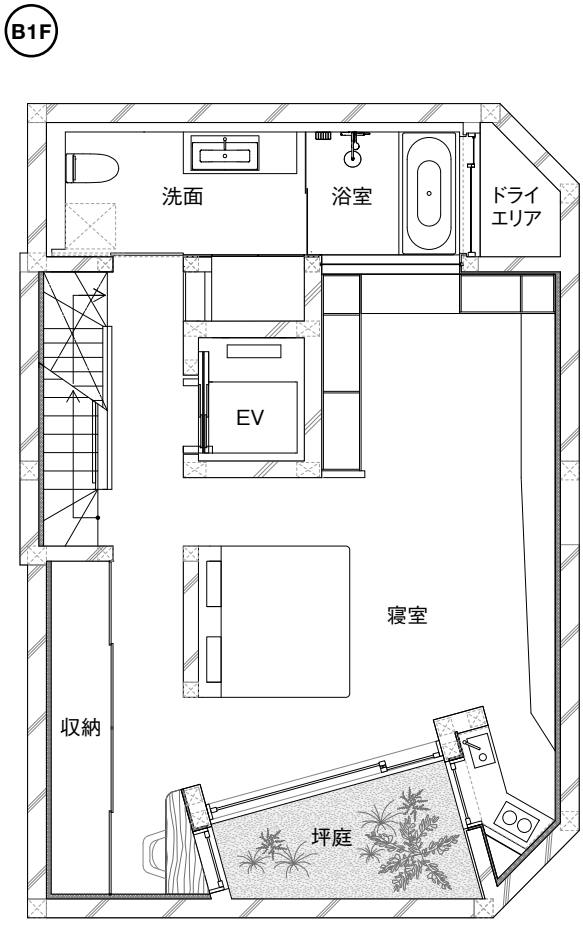
「昔の日本の家には、玄関と勝手口のほかに、お葬式や結婚式のときだけに使う入口があったり、縁側から出入りしたりしていましたよね。人を招くことと生活が一体となっていて、それはとても豊かなことだと思うんです。建築家の西澤文隆さんが、『最近の住宅は玄関がふたつになってしまった』と嘆かれたというお話を以前聞いたことがありますが、今はふたつどころか勝手口すらない家も多いですからね」

単に玄関の数が多いというだけではない。この家は、招き入れる客の数や親密度によって、どこまでを街の一部として開放して、どこからプライベートな空間にするかを切り替えて使うことができるのだ。たとえば親しい友人数人が集まるのであれば1階の玄関から入ってもらい、ダイニングで食事をして2階のデイベッドコーナーでくつろぐ。大人数のパーティのときには、外階段で2階に上がって踊り場テラスで靴を脱いでもらい、書斎テーブルでドリンクを飲んでおしゃべりを楽しんだ後に、1階に下りてきてもらう。また3階の客室は内部階段ではつながっていないので、独立したゲストハウスとして貸し出すことも可能だ。「招く／招かれる」の動線が交わる場所を状況に合わせて設定できるため、招き方のバリエーションも広がるのである。

## 建主の要望は、エレベータの設置のみ

建主は60代と70代のご夫婦。広島で病院を経営しており、東京に分院を開業するに



あたって伊東豊雄氏に設計を依頼。当時の現場担当だったのが、独立する前の百田さんであった。その縁もあり、東京で終のすみかを建てるにあたって依頼が来たという。建主の要望はごくシンプルで、「早くつくってほしい」「ホームエレベータをつけてほしい」のふたつだけ。あとは若いふたりを信頼し、応援してくださった。

最初に出した案は、シンプルなガラスの箱に千鳥状の壁面というコンセプチュアルなもの。レム・コールハースの「ボルドーの家」（1998年）のように、エレベータを巨大な床面にして、階が上下するごとに別の空間が現れる仕掛けであった。だがこの案を伊東氏に見せたところ、「考え直すべきだ」とアドバイスをいただいた。ただダイアグラムを空間的に置き換える建築ではなく、別の手法に向きあうべきではないかという。そこで1年ほど続けていた設計を白紙に戻し、まずは具体的な生活のシーンから想像をふくらませてみることから始めた。光の射し込むキッチンで朝食をつくって食べる、陽当たりのよいソファコーナーでくつろぐ、といった断片的なスケッチを描き、それらを包括することで建築を立ち上げていったという。

「最初はまったく構成のない、もっとぐちゃぐちゃな平面だったのですが、途中でずいぶん整理して、3枚の壁をバラの花びらのように配し、その隙間から光や風が入る現在の構成に落ち着きました」と大西麻貴さんが振り返る。内階段と外階段が入り組んでいた上下動線も整理され、屋上の茶室まですべて外階段で上っていく「招きの動線」が定められた。

## 住人の動線と客の動線が茶室で合流

大西さんと百田さんは一貫して「経路と経験」に関心を寄せてきた。「二重螺旋の家」（2011）は、狭い路地から廊下に入り、内階段を上って、外階段を下り、行きどまることなくループ状に歩きまわることができる家。移動体験の連なりそのものを楽しめる設計だが、そんな感覚のベースとなったのは京都での学生生活だという。

「下宿から自転車に乗って大学や買い物先や図書館に行くルートの途中で、鴨川を渡ったり、有名なお寺を横切ったり。そうした経路での一連の体験が、自分の身体や心の一部になっていくような感覚があって、それが京都という街への特別な愛着につながっているように思うんです」と百田さん。自動ドアとエレベータで自宅に直行するのではなく、街の気配を感じながら家に入り、住むことで周囲に愛着が芽生えるような家をつくりたいという。確かにこの家の外階段を上っていくと、自ずと隣家の壁のテクスチャーや鉢植えの赤い花、軒先で切り取られた空の表情が目に入り、住人はその変化を日々感じることであろう。

長い経路の終わりは最上階の茶室。当初は現代的な和室を想定していたが、建主が茶道を習っている上田宗箇（そうこ）流家元が監修し

Special Feature

Designing Floor Plans for Visitors

2階の書斎からデイベッドコーナーを見る。1階、3階と吹抜けでつながっている。（＊）

2F

1F

1階のダイニング。奥の階段を上ると2階。階段脇には、大きな開口部がある。（＊）

左ページ写真右下／1階の玄関脇の外階段。らせん状に住宅を取り巻く階段やテラスを進むことで、直接2階、3階、屋上の茶室に行くことができる。左下／2階の踊り場テラス。外廊下だが、建具の開閉で室内化することもできる。右上／3階のゲストルームの前にあるテラス。左上／屋上にある茶室の躙り口と露地。（＊）

RF ← 3F

2F ← 1F

屋上の塔屋にある三畳中板の茶室。上田宗箇流の家元の監修のもとでつくられた。(*)

RF

てくださることとなり、伝統的な工法による本格的なものとなった。

「茶室は暗いほうがいい。暗さは自分と向きあうためにも必要なのです」という家元の助言に従い、晴天でも室内はほの暗く、厳粛な気分にさせられる。主人と客の動線がさまざまな場所で交錯する家にあって、最上階の茶室は、外階段をまわって躙り口から入る客と、室内のエレベータで上った主人が最後に対面する、いわば「招きの場」のクライマックス的空間となっている。「広島の安閑亭という茶室をお家元に見せていただいたのですが、抽象的な外露地から門をくぐると一転、緑あふれる有機的な内露地が広がり、ほんの小さな茶室に至るまでに用意された、さまざまな空間のぜいたくさに驚かされました」と大西さんは言う。

都心の一等地、決して広くはない敷地にこれだけの階段スペースをあてれば、居住スペースは減り、リビングやゲストルームの面積は割を食う。だが、多彩な客人を招き入れ、街の気配を取り込み、茶室へと続く長いアプローチにもなる1本の道のほうが、より豊かで、かけがえのない経験をもたらしてくれることを、設計者も建主も確信しているのであろう。

地下1階の寝室。坪庭からの光が地階まで届いて、明るい空間になっている。(*)

B1

Case Study 1

東側外観。

# 「house h」

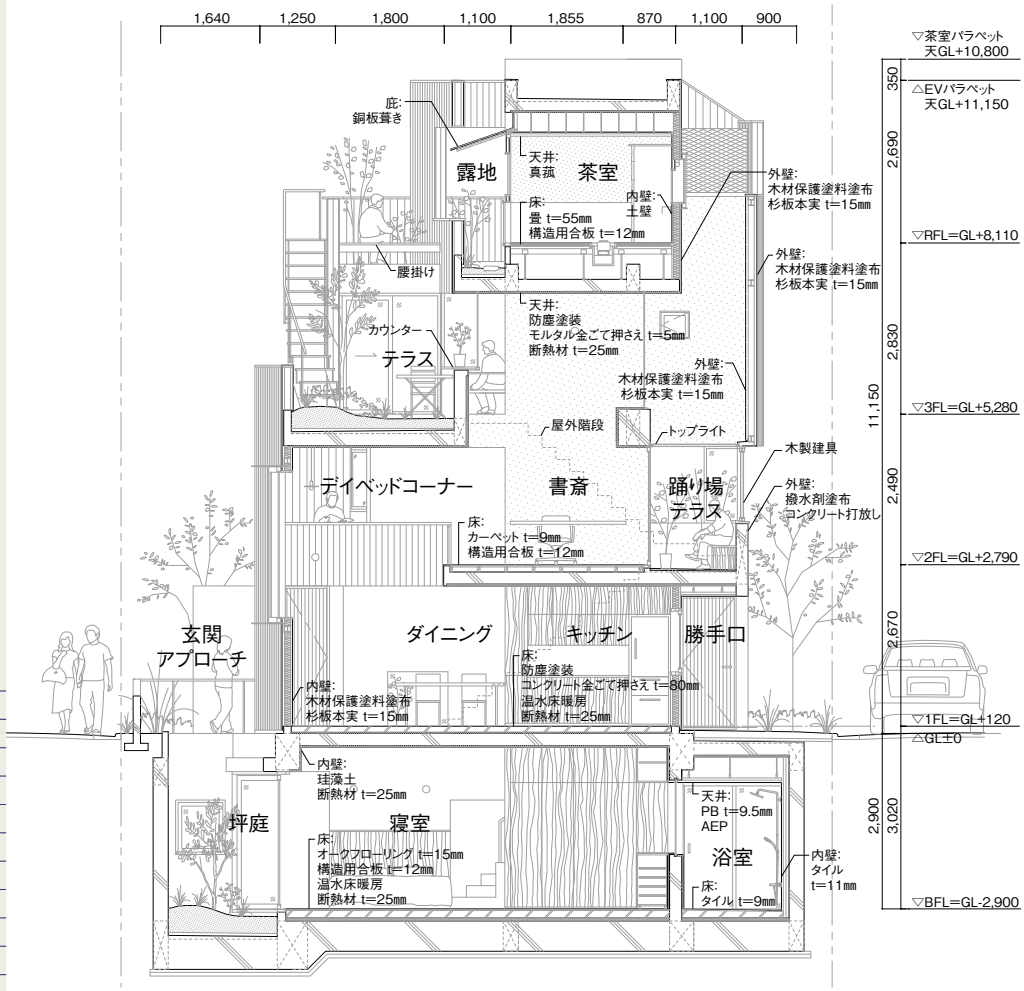
| 建築概要 | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都港区 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 大西麻貴+百田有希／o+h |
| 構造設計 | yAt構造設計事務所 |
| 構造 | 鉄筋コンクリート造 |
| | （一部鉄骨造） |
| 施工 | 工藤工務店、 |
| | 藤森工務店（茶室設計施工） |
| 階数 | 地下2階、地上3階、塔屋 |
| 敷地面積 | 95.92㎡ |
| 建築面積 | 49.81㎡ |
| 延床面積 | 213.06㎡ |
| 設計期間 | 2014年7月〜2016年4月 |
| 工事期間 | 2016年4月〜2018年2月 |

| おもな外部仕上げ | |
|---|---|
| 屋根 | コンクリート打放し 塗膜防水 |
| 壁 | 杉板本実 木材保護塗料塗布、 |
| | コンクリート打放し 撥水剤塗布 |
| 開口部 | 木製建具、鋼製建具 |

| おもな内部仕上げ | |
|---|---|
| キッチン、ダイニング | |
| 床 | モルタル金ごて押さえ 防塵塗装 |
| 壁 | 珪酸カルシウム板 |
| | AEP（キッチン）、 |
| | スタイロ用モルタル |
| | AEP（ダイニング） |
| 天井 | スタイロ用モルタル AEP |
| ゲストルーム | |
| 床 | オークフローリング |
| 壁 | PB t=12.5㎜ AEP、 |
| | 水野製陶園タイル（特注） |
| 天井 | スタイロ用モルタル AEP |

## 断面図 1/125

0 1 2m





## 大西麻貴
Onishi Maki

おおにし・まき／1983年愛知県生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。08年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。11年同大学大学院博士課程単位取得退学。08年から大西麻貴+百田有希／o+hを共同主宰。横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手などを経て、17年から同大学大学院Y-GSA客員准教授。

## 百田有希
Hyakuda Yuki

ひゃくだ・ゆうき／1982年兵庫県生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。08年同大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。09〜14年伊東豊雄建築設計事務所勤務。08年から大西麻貴+百田有希／o+hを共同主宰。

o+hの事務所の前にて。
百田さんが持っているのは「house h」の模型。

おもな作品=「二重螺旋の家」（2011）、「小屋と塔の家」（16）、「Good Job ! Center KASHIBA」（16）。

築35年ほどの住宅の改修。能作さんの奥さまの実家。バルコニーで出迎えているのは、奥さまの両親、訪れているのは、能作さんの奥さまとお子さん。

# 裏庭が、客を招く入口になった

Special Feature

# Designing Floor Plans for Visitors

作品　あきるのシルバーハウス

設計　能作淳平

南側に庭やバルコニーを設けた家がたくさん並んでいる。そんな住宅街の画一的な光景を変えるべく、南側の庭やバルコニーを、人を招く大きな「土間」に。プライベートな空間が、街の人々が集う場に生まれ変わった。

取材・文／本橋 仁　写真／桑田瑞穂

Case Study 2

毎朝、通勤電車で職場に通い、夜はベッドにもぐり込む。そして、また次の朝を迎える。都市人口が増えた高度経済成長期、沿線の住宅開発のなかでベッドタウンという和製英語が生まれた。新しい生活を始める若い夫婦に与えられた間取りは、夜のひとときを、家族水入らずの団らんを楽しむには何不自由なかったであろう。

「あきるのシルバーハウス」もまた、1984年、東京の西部に開発されたベッドタウンに建てられた住宅のリノベーションである。この家は能作淳平さんの奥さまのご実家。つまり建主は能作さんの義父母にあたる。依頼のきっかけは、その義父が定年退職を迎えたことにあった。自宅の改修設計を依頼され、要望を聞くなかで、ふと義母が口にした「近所の方を招いて、お茶を飲める場所をもちたい」という言葉。これが能作さんにはどうも引っかかった。

## 庭を土間に、間取りの大改造

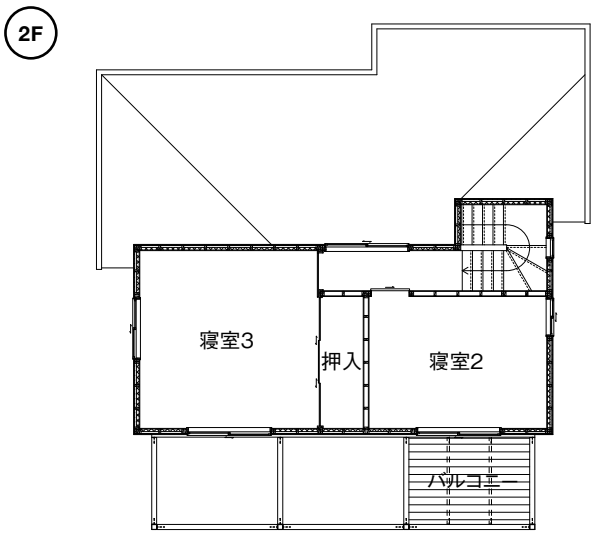
この住宅地から車で向かえば、すぐに大規模なショッピングセンターもあるし、ちょっとしたお出かけには立川もそう遠くない。しかしぶらぶらと歩いて立ち寄ることのできる場所が、この街からスッポリと抜け落ちているという事実に、能作さんは奥さまの実家で過ごすうちに気づかされた。その理由を考えればあたりまえのことで、日中働きに出かけ、帰宅すればそれぞれの家で団らんを楽しむ、というベッドタウンのライフスタイルが、街にそうした場所を求めてこなかったのである。

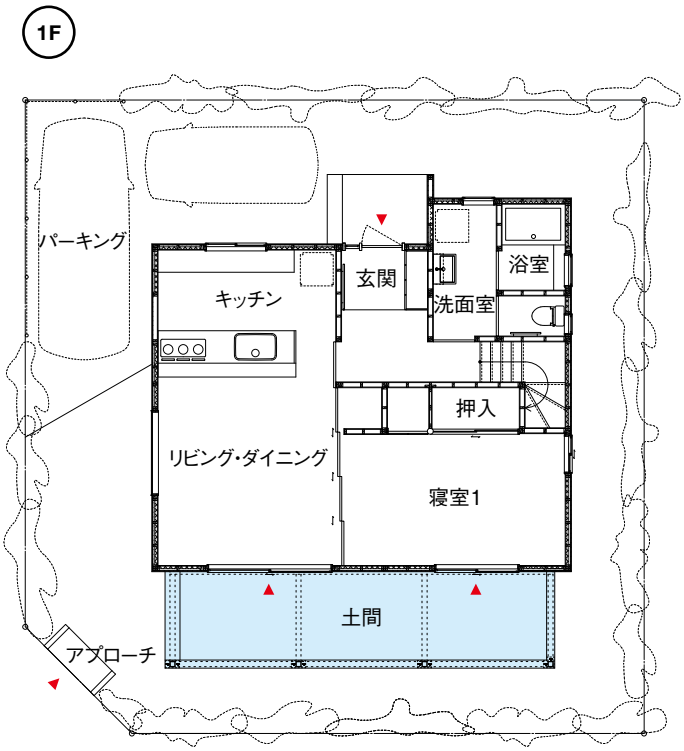
そこで能作さんはリフォームにあたって、大きく2点の間取りの大改造を行った。これからの介護に備えて、まず南側の庭に面した既存の寝室1とリビングとをひとつながりの部屋として、間取りを「統合」した。ただし必要なときには閉じることもできるように間仕切りをつけたが、床はフラットで連続しているし、間仕切りはすべて引き込むこともできる。次に庭側に張り出すように、屋根とカーテンをもった大きな白いフレームの構造体を付加した。コンクリートを打ち、土足のままで過ごせる場所を、能作さんは「土間」と呼んだ。

昔の民家には玄関から入った先に土間があり、そこから部屋に上がり込んだものだ。そこは煮炊き場にも、仕事場にもなった。職住一体の家には、土足で生活できる、外

## 平面図 1/150

0 1 2m




接客のためのスペース ▲出入口

南側に庭があり、北側に玄関がある間取りを改修し、メインのアプローチを南側に変更している。土間は、近隣の人と過ごすパブリックなスペースであるとともに、大きな玄関でもある。その結果、リビング・ダイニングにも人を招きやすい間取りになった。また、「シルバーハウス」という名前のとおり、寝室1で介護をする際に、土間が広いため、ヘルパーの方が入りやすい間取りにもなっている。建具を開けば、被介護者が孤立せずに、リビング・ダイニングや土間の家族や友人とも交流しやすい。

1F

土間は、幅1,900㎜、奥行き7,500㎜の細長い空間。風や視線などを適度にさえぎるカーテン（防炎メッシュシート）で囲われている。

1階のリビング・ダイニング、キッチン。テーブル脇の出窓をすっきりとした窓に改修している。

1F

と中との「のりしろ」のような場所が必要でもあった。「あきるのシルバーハウス」は、それよりも大胆に外に開かれている。限りなく外環境に近いにもかかわらず、ここにいても家の中にいる感覚を呼び覚ますのは、それをスッポリと覆うカーテンのおかげだろう。白いカーテンが、風にそよいでいる姿は、この家の印象を決定づけている。

さて、これまで南側の庭は、道に面してはいるものの、垣根でへだたれていて、街に対して閉ざされていた。そこで思い切って垣根の一部を切り取って、そこに新しい玄関を設けた。門扉は設けず、チェーンだけ。セキュリティには欠くかもしれないが、むしろ老後の生活の場としては、近所に生活の断片が少し見えるほうが、より安心な暮らしにつながるのではないか、という考えもあった。一方で、もともとの玄関は裏手に残されているため、この家は玄関をふたつもったわけだ。結果として、この庭から入る入口によって、土間を通って、リビングと寝室1のそれぞれの掃き出し窓から家の中に上がれるようにもなった。間仕切りを閉じて2部屋として使う場合も、リビングと寝室1、どちらからでも入れる利便性がある。さらに、双方の部屋の雰囲気は、この土間で共有できる。

竣工して間もなく、奇しくも新しい玄関はその真価を問われることになる。介護の手が必要な祖母が同居することになったからだ。結果、ヘルパーもこの土間を経由し、今は祖母がベッドを置いて専有している奥の部屋（寝室1）まで、ほかの部屋を通ることなく行き来できるのである。ゆくゆくは、「シルバー」となる両親を見越した設計をしていたのだが、早速その有効性が実証されたのであった。

1F

リビング・ダイニング。奥に寝室1。建具の開閉で、一体的に使うこともできる。

## 招く側の個性が見えるスペース

新しく建て直す、という選択肢もあった。しかし、結果としてリフォームを選択した理由には、能作さん自身が感じたベッドタウン特有の問題を、リフォームを通して解決することで、ほかの街にも適用可能なモデルにならないかと考えたからでもあった。どこのベッドタウンにも欠けていた機能。それは「近所の方とお茶を飲める場所」。そ

1F

土間から、リビング・ダイニングを見る。土間で食事をするときも、キッチンからスムーズな動線。

の要望を叶えたことで、街にとっては大きな変化をもたらした。

今、誰もが使え、日々の何気ない会話ができるコミュニティスペースなどが増えている。いくら携帯やネットを介したコミュニケーションが台頭しようとも、人は昔の井戸端会議のような触れ合いを求めている。一方で、より親密な関係を築くためには、「ご自由にどうぞ」と誰にでも平等に投げ出された場所ではなく、「迎える側の個性がきちんと見える関係性をデザインすることも大事なのではないか」と能作さんは語る。土間にかけられた大きなカーテンはたとえ開け放たれ、端に寄せられた状態であっても、ここがその家の大きなひと部屋であることを主張している。

「近所の方とお茶を飲みたい」という要望から生まれたこの場所は、予想外にも街に住む「オヤジたち」にとって、格好の飲みの場となった。それまでは、わざわざ電車にのって近くの街まで繰り出していたそうだ。能作さんの気づきによって、毎日電車で揺られていたかつてのサラリーマンたちは、いよいよ終電を気にすることなく、夜のゆっくりとした時間を過ごす場所を街のなかに見つけたのである。

Special Feature

Designing Floor Plans for Visitors

土間をつくったことにより、裏庭がメイン玄関に生まれ変わった。南側のため、明るい空間。

改修前からある北側の玄関。ちょうどキッチンの脇にあり、勝手口のような存在になった。

南側外観。防炎メッシュシートのカーテンをすべて閉じた状態。

1F

カーテンは、それほど力を使わなくても、手動で開け閉めすることができる。

1F

左手に腰かけているのは、同居している能作さんの奥さまの祖母。ヘルパーさんも、土間の掃き出し窓から、祖母が住む寝室1に出入りできる間取り。

Case Study 2

# 「あきるの シルバーハウス」

| 建築概要 | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都あきる野市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 能作淳平／ |
| | ノウサク ジュンペイ |
| | アーキテクツ |
| 構造設計 | 坂田涼太郎構造設計事務所 |
| 構造 | 木造（一部鉄骨造） |
| 施工 | 工藤工務店 |
| 階数 | 地上2階 |
| 敷地面積 | 154.92㎡ |
| 建築面積 | 68.90㎡ |
| 延床面積 | 105.12㎡ |
| 設計期間 | 2014年1月～2015年4月 |
| 工事期間 | 2015年5月～2015年8月 |

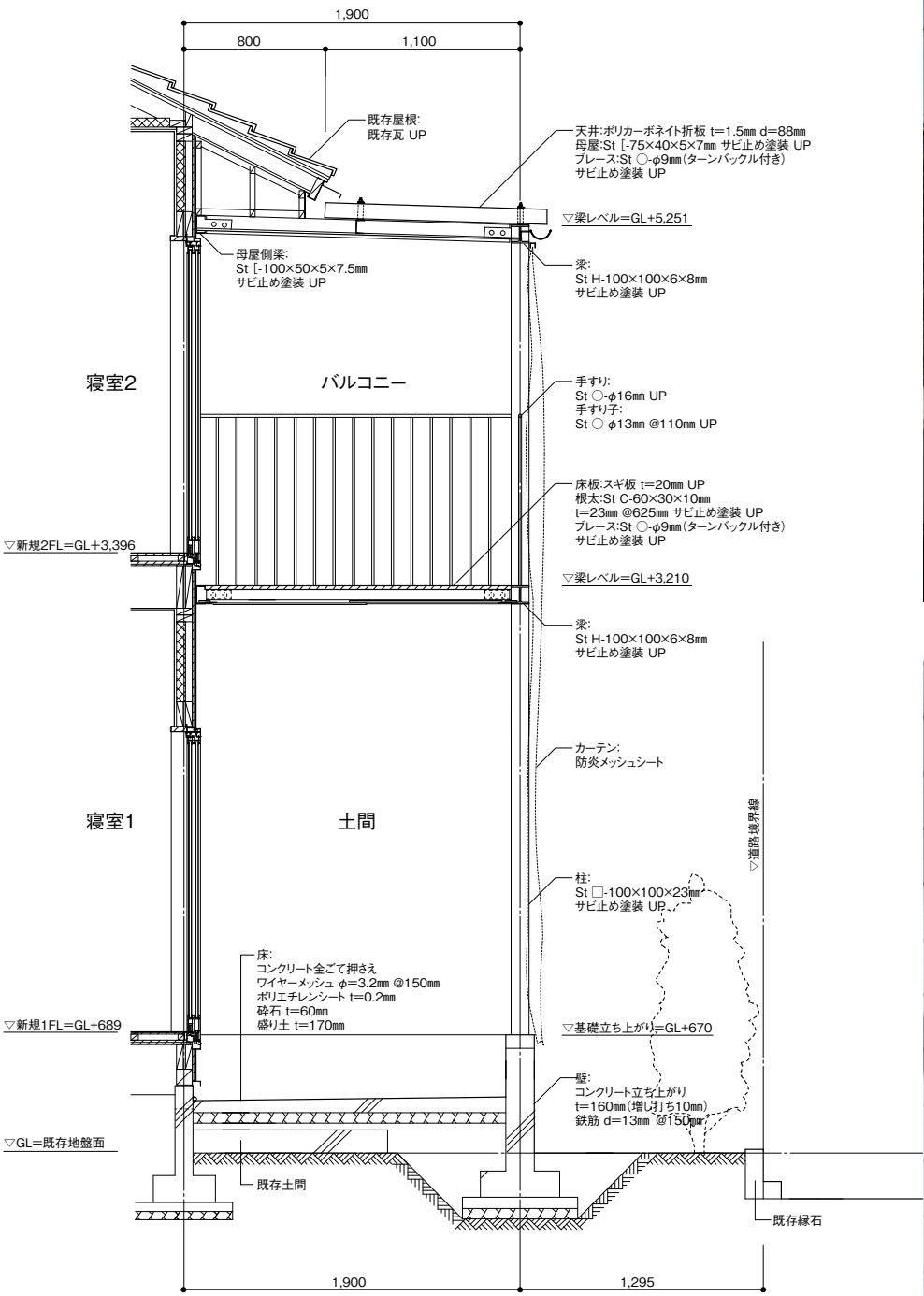
| おもな外部仕上げ | |
|---|---|
| 屋根 | 既存瓦 UP |
| 壁 | 既存サイディング |
| | （土間部のみ、 |
| | 既存外壁の上にUP） |
| 開口部 | アルミサッシ |
| 外構 | コンクリート金ごて押さえ、 |
| | 砂利 |

| おもな内部仕上げ | |
|---|---|
| リビング・ダイニング、キッチン | |
| 床 | ラワン合板 |
| 壁・天井 | ビニルクロス |
| 客室 | |
| 床 | 畳 |
| 壁 | 珪藻土 t=2mm |
| 天井 | スギ板 |

能作淳平
Nosaku Junpei

のうさく・じゅんぺい／1983年富山県生まれ。2006年武蔵工業大学（現・東京都市大学）工学部建築学科卒業。06～10年長谷川豪建築設計事務所。10年ノウサクジュンペイアーキテクツ設立。おもな作品=「新宿の小さな家」(11)、「ハウス・イン・ニュータウン」(14)、「富江図書館 さんごさん」(17)。

## 部分断面図（土間） 1/40



Special Feature

Designing
Floor Plans
for
Visitors

| | |
|---|---|
| 作品 | 新釜座町の町家 |
| 設計 | 奥谷繁礼 |

もともと町家は、人を招くことが多い建築だった。その町家の性質を引き継いで、現代らしい接客のあり方を追求。プライベートな個室を2階に集約させることで、1階の通り土間や客間、そしてLDKもまた、多様な接客のためのスペースとなった。

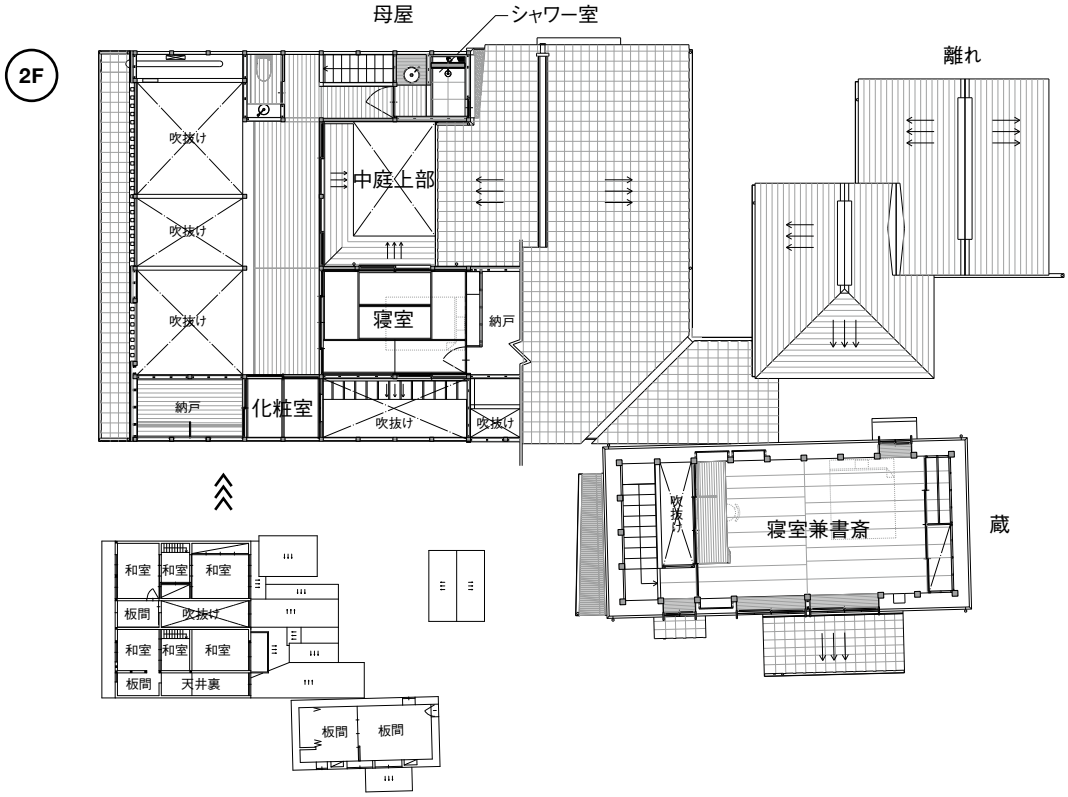
取材・文／橋本 純　写真／傍島利浩

1F

玄関から通り土間を見通す。町家らしく火袋（トップライト）から光を取り入れている。左手には居間や玄関の間。通り土間に立っているのは奥谷さん。

# 個人のスペースをしぼり、来客のために町家を開放

# 平面図 1/200




改修前平面図 1/500

改修前平面図 1/500

接客のためのスペース ▲出入口

並び立つ2軒の町家を、1軒の町家として改修している。既存の状態からさらに以前の平面プランを復原するかたちで、通り土間が奥の庭まで伸び、通り土間に沿って部屋が配置されているところなど、町家の基本的な間取りを踏襲している。ご主人は南側の蔵、奥さまは2階と、住人のプライベートなスペースを一部にしぼることにより、1階の町家全体が人を招くことができる接客のスペースになっている。トイレやシャワーなども蔵と2階に個別に用意されている。

## 京都で古いエリアの町家で暮らしたい

「新釜座町（しんかまんざまちょう）の町家」は、京都市下京区、四条烏丸を西に入り南に下がった路地に面して立つ。

京都は、平安時代に築かれた120m（40丈）角の街区を、豊臣秀吉が半分に割って南北に道を通したことで、南北120m×東西60mという現在のおもな都市基盤が形成されている。ところが四条烏丸周辺には、南北に割られていない120m角のままの街区が存在する。そこは応仁の乱の後にいち早く復興して人が居住し、秀吉が街区を割る必要のなかった地域であった。つまりこの敷地周辺は、京都のなかでも最も古くから栄えていたエリアのひとつなのである。祇園祭がこの地域を中心に催されていることはそれを裏づける。

この町家が面する路地が四条通から下がって鉤の手に折れながら南に抜けているのは、この路地が秀吉以前に自然発生的に生まれたからであった。今日では2項道路だが、地域の方々の努力で、昔ながらの町家の落ち着いたたたずまいがかろうじて残されている。

その土地を選んだ建主は、イギリス人の夫と日本人の妻の夫婦である。ロンドン在住だが、かつて京都の町家に住んでいた経験のある夫は、将来は京都にも拠点をもちたいという願望をもちつづけていた。そして知人の紹介でたまたま2軒の町家が並んで空家になっていたこの土地を入手し、裏の家から蔵付きの土地も譲り受けた。

もともと設計者の奥谷繁礼さんとは面識がなかったが、やはり知人の紹介で出会っている。土地も人も信用のおける人物を介してというところが京都らしい。土地や建物は個人資産であるだけでなく、都市の資産でもあるという認識が働いているからであろう。

当初は、春秋の気候のいい時期に来日するくらいのつもりだったが、祇園祭の夏や冬の京都も気に入って、現在では一年の半分くらいをこちらで過ごすという。彼らは、京都の町家で静かに暮らしたい、ときどき友人を招いて楽しく過ごしたい、と要望した。

## 2軒の町家を1軒に再構成した

京都の町家には、業態の違いによってい

Special Feature

Designing Floor Plans for Visitors

新釜座町という京都の古い街並みの一画に立っている。左手前が「新釜座町の町家」。

1F

通り土間から入口側を見通す。通り土間には沓脱ぎ石が置かれ、右手の玄関の間とつながっている。

1F >>>

厨房・食堂から、居間や中庭を見る。住人のためだけではなく、親しい友人も招く居間。

<<< 1F

玄関の間。左手に居間、右手に客間1と相の間。状況に合わせて、客を招く部屋を使い分ける。

1F >>>

客間1から、縁側、庭、その奥の離れの客間2、浴室を見る。床の間のある典型的な座敷。

Special Feature

Designing Floor Plans for Visitors

くつかの形式があるという。商家では前面に店を配して奥に座敷を設ける。西陣などの工場では奥に土間を設けて工具を配する。お茶屋はほとんどすべてが座敷である。いずれも働く場を内包するため、人を招き入れる形式となっている。さて、「新釜座町の町家」は、そうした町家の形式をどのように解釈したのか。

まず、2軒の町家を1軒にしたことで間口が10mほどとなった。南側の通り土間を残し、前面道路側に間口8565㎜、奥行き4925㎜の板の間を設けた。ここがLDKで床暖房を備えている。アイランドキッチンとソファに加え、通り土間の脇には天板に昇降装置を付けた掘り炬燵（ごたつ）を配している。板の間の奥に6畳の玄関の間と坪庭、その奥に6畳の二間続きの座敷（相の間と客間1）を配置し、3つの和室と坪庭で田の字型を形成する。北側に廊下を設け、回遊できるようにしている。こうした平面構成は近代以降の民家にしばしば見られるもので、部屋を通過動線にしない配慮である。客間1の東側は既存部分を一部撤去して広い庭をとり、そこに離れ（客間2）と浴室を設けている。

2軒をひとつにしたことで、部屋を奥行き方向に一列に連続させるだけでなく、2列で連続させられるようになった。そこで奥谷さんは、坪庭をあけたり庭を広げて離れを置いたりと、京間のモジュールを生かしてパズルのように空間の粗密をつくり出した。明るい空間と暗い空間の繰り返しや、最奥部に一番明るい庭があるといった、これまでの町家の奥行きを基本とした空間構成を相対化している。そしてこの粗密は、奥性がつくり出すプライバシーによるヒエラルキーをも解体している。

## 2階を個人の場にすることで、1階を来客に開かれたスペースに

この住宅では、母屋の2階と奥の蔵がそれぞれ妻と夫の個人の場にあてられている。坪庭の北側に置かれた箱階段で上がった2階は妻のプライベートスペースで、トイレ、シャワー室、化粧室、寝室が完備されている。1階のフロアレベルより1350㎜上がった南東の蔵は夫のプライベートスペースである。1階にトレーニングジムと浴槽とトイレ、2階に書斎と寝室がある。蔵だけ床レベルが異なるのは、反対側の町家から譲り受けたことによる。

パブリックな1階とプライベートな2階というすみ分けが設計された。シェアハウスに近いように見えるが、パブリックスペースとは別に、「機能的に完結した個室」がふたつ挿入された構成だから、シェアするものの質がまったく違う。

この構成を踏まえ、一般的な現代の住宅と「新釜座町の町家」の違いを空間図式で比較してみたい。前者では、玄関を入った瞬間から家族だけの空間が広がり、家族以外の人間と空間をシェアすることは難しい。それは来客が基本的に想定されていない空間構成だからである。外側に強い殻をもち、内部は家族という特定の人間たちだけの空間で、来客は非日常である。

一方、後者では、板の間や座敷といったマルチパーパスな空間が広がる代わりに、個人のための完結した空間が別途用意され

ている。外側をゆるい殻とし、その内部に個人のための強い殻が点在する。

つまり、外側の固い殻に守られた家族のためだけの家と、来客に開かれたゆるい殻の中に個人のための固い殻を有する家、との違いである。

## 人を招く行為を通じて家族の空間を再考する

家族のための空間を、来客のための空間に転換したこと、それがこの住宅のなしえたことだった。

言い換えれば、「新釜座町の町家」とは、家族のための空間というものを事実上なくし、完全な個人の空間を個別に用意することで成り立っている住宅なのである。

この空間構成は、客間と茶の間を並べた近代民家とも、家族のための殻となった現代住宅とも異なった、これからの住まいへの問題提起なのではないか。

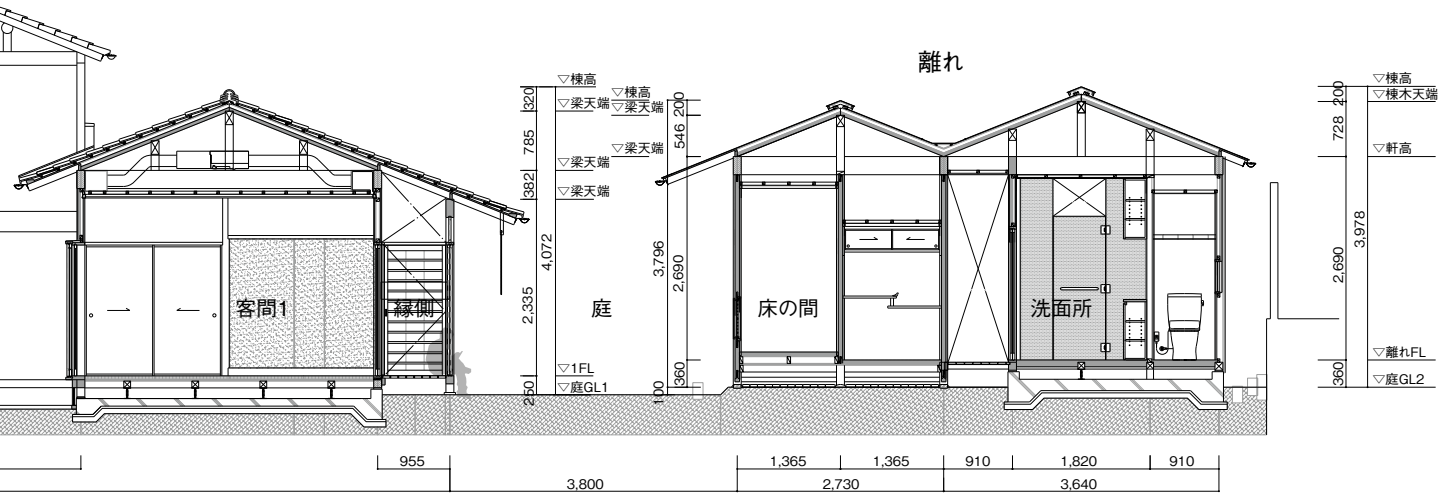
そもそも近代家族とはなんなのか。生物学的定義以外に一緒に暮らす理由とはなんなのか。家族と個人とはどういう関係にあるべきものなのか、そこにおける個人の尊厳とはどのように空間化されるべきものなのか。そもそも人が人とともに暮らすとはどういうことなのか。ほとんどの人たちが疑いをもたないままにゆらいでいる日本の現代社会における個人と家族と住宅に対する根源的な問題を、人を招くという行為を通して、この住宅は浮き彫りにしてくれている。

1F 客間2や客用の浴室に至る外廊下には、腰掛けられる待合が設けられている。草庵茶室風。

1F 離れの客間2。四畳半。曲り柱、下地窓、掛込天井など、草庵茶室風の造りになっている。

1F 離れの客間2に付属した浴室。地窓越しに庭を見ながら檜風呂に入ることができる。

# 断面図 1/100



2F

写真上／敷地の南側にある蔵は、ご主人のプライベートなスペース。2階には書斎を兼ねた寝室がある。左／蔵の1階は、身体を鍛えるジムのスペース。陶器風呂、シャワー室、トイレも付属している。

Case Study 3

# 「新釜座町の町家」

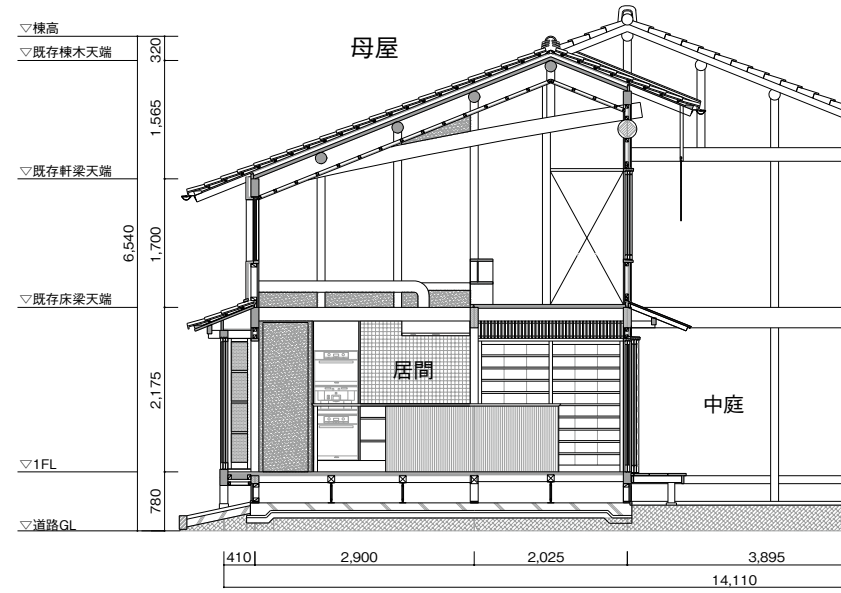
| 建築概要 | |
|---|---|
| 所在地 | 京都府京都市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 奥谷繁礼建築研究所 |
| 構造 | 木造 |
| 施工 | アプト |
| 階数 | 地上2階(母屋・蔵)、地上1階(離れ) |
| 敷地面積 | 383.14㎡ |
| 建築面積 | 184.25㎡ |
| 延床面積 | 260.56㎡ |
| 設計期間 | 2014年2月〜2014年9月 |
| 工事期間 | 2014年10月〜2016年2月 |

| おもな外部仕上げ | |
|---|---|
| 屋根 | 瓦葺き(和形銀いぶし瓦、一部既存瓦)、カラーガルバリウム鋼板 一文字葺き |
| 壁 | スギ板張り、黒漆喰塗り、既存白漆喰塗り(補修)、土壁中塗り仕上げ、既存土壁(補修) |
| 開口部 | 木製建具 |

| おもな内部仕上げ | |
|---|---|
| 通り土間 | |
| 床 | 三和土仕上げ |
| 壁 | 土壁中塗り仕上げ |
| 天井 | スギ羽目板 t=12㎜、一部垂木・野地板現し |
| 居間、厨房・食堂 | |
| 床 | ヒノキ板張り t=15㎜ |
| 壁 | 土壁中塗り仕上げ |
| 天井 | スギ羽目板 t=12㎜ |
| 玄関の間、相の間、客間1、客間2 | |
| 床 | 畳敷き t=45㎜ |
| 壁 | 土壁中塗り仕上げ |
| 天井 | スギ中杢板、竿縁天井、スギ鏡板、垂木・間垂木・木舞(客間2の掛込天井部)、スギ柾突板矢羽網代天井(客間2の平天井部) |

奥谷繁礼
Uoya Shigenori

うおや・しげのり／1977年生まれ。兵庫県出身。2001年京都大学工学部卒業。03年同大学大学院工学研究科修士課程修了。現在、奥谷繁礼建築研究所代表。おもな作品=「京都型住宅モデル」(07)、「京だんらん 東福寺」(11)、「もやし町家」(15)。



<<< 2F

写真左／2階の寝室。桜の花びらの草木染めをした和紙を、壁や天井、障子に貼っている。下／主屋の2階は、奥さまのプライベートなスペースになっている。寝室前のラウンジのようなスペース。

商店街の一画にある3階建ての住宅。2階の床レベルは、4,200㎜ほど持ち上げられている。1階に大坪さん、2階に増田さん。

# 1階は、まるまる客間でもある

Special Feature

Designing
Floor Plans
for
Visitors

作品　街の家

設計　増田信吾+大坪克亘

両隣を建物に挟まれた間口の狭い立地。光と風、そして眺望を求めて、居住スペースは、高く上空に持ち上げられた。その結果、1階は土間のような場所に。玄関までのアプローチであり、作業場であり、そして客と過ごす場所でもある。

取材・文／加藤 純　写真／山内紀人

1F

奥行きが10m以上ある土間のような1階。接客の場所にもなる。昨年末、棚を兼ねたブレースで構造補強している。

## 生活の場を4・5mほど持ち上げる

一方通行ながら、バスの通る商店街。昔ながらの木造2階建てやRC造の商店が互いに接するように立ち並ぶなか、道に面した地上部分があいた区画がある。接道した西側の間口は約3m。道を歩いていると気づかずに通りすぎそうだが、見上げるとガラス窓のファサードをもつ2層分の建物が、持ち上げられたようにつくられている様子がわかる。

街の雰囲気が気に入っていた建主夫妻は、この商店街に面した敷地を、大学の頃からの友人だった増田さんと大坪さんに相談のうえ購入。大きな課題となったのは、通り面をどのようにつくるかということだった。「街とのかかわりを大切にしたい」という建主の想いをくみながら、高さ3mのバスが通るときの音や視線を避けることはできないか。同時に、妻が求める見はらしのよい景観を確保できないか。

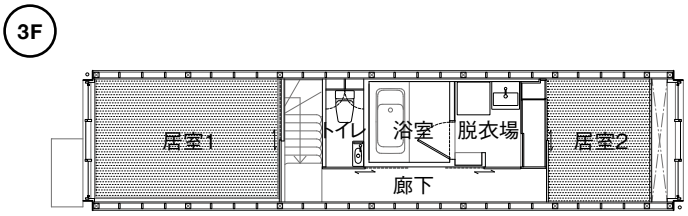
増田さんは「当初は、上下階を貫く階段室を利用して光を1階まで届けるプランも検討しました。でも、不自然にがんばるよりも、光と風が通るところにプライベート空間を持ち上げるほうが無理がないと判断したのです」と語る。こうして2階を地上面より4・5mほど持ち上げることで、2階以上は交通の影響を避け、3階寝室からの眺望を得る、また地上面を街に接続したヴォイドのある特徴的なプランが立ち現れた。

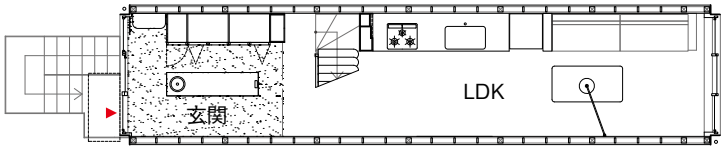
## 1階は動線であり、作業場であり、人々の集いの場でもある

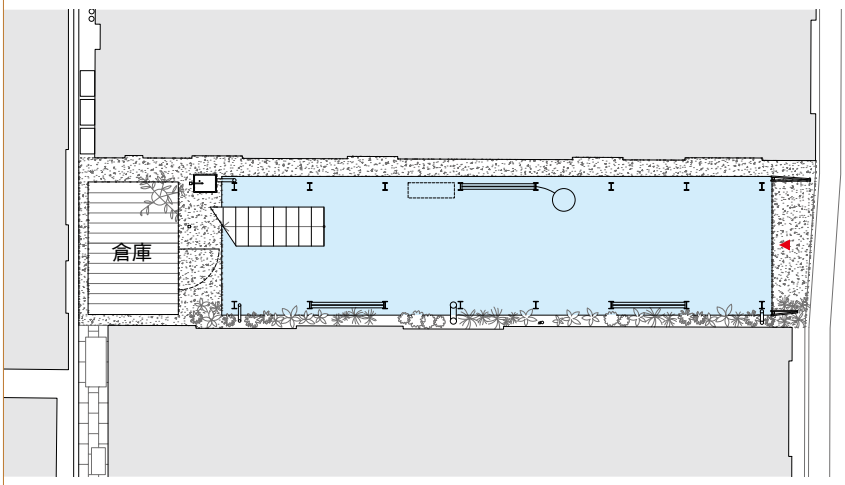
1階のスペースに対して、増田さんと大坪さんは用途を連想させる特定の名前をつけていない。道路面より200㎜立ち上げられた基礎の面はフラットに奥まで続き、土間のように洗い出し仕上げにしている。道路境界とはアルミの小さな柵で区切られるが、すべて開け放つこともでき、道路から路地が引き込まれているようにも見える。そして道路側の床には木製のベンチやフロアランプが置かれ、また頭上の揺れ止めを兼ねた棚には植栽が並べられ、半屋外の居室のような雰囲気が漂う。細長いヴォイドの両側には壁を設けず、隣家の外壁がそのまま見えている。途中に現れている鉄骨の柱には、ブレースがパイプで取り付けられた。「ワイヤーのブレースでは、インテリア的に見えてくる。街に属する構造物としたかった」と増田さんは意図を語る。DIYの趣味をもつご主人は、訪ねてきた友人とこの場で一緒に手を動かしながら時間を過

### 平面図 1/150

0 1 2m




接客のためのスペース　▲出入口

1階の間口が2,300㎜ほど、奥行きが10mほどの細長い間取り。寝室となる居室や浴室などのプライベートなスペースが3階、客を招くこともあり、ややパブリックな性格をもつLDKが2階、そのほか、さまざまな用途に使えることを期待した広いスペースが1階に設けられている。子どもたちの遊び場になったり、接客の場にもなる。特定の用途に固定しないため、設計者の増田さんと大坪さんは、あえて1階には室名をつけていない。

ごすこともあるという。

奥に向かうにつれて、前面道路から入る光は弱まっていく。2階床下面までが高く、気積の大きな空間では、明るさがグラデーションとして感じられ、次第にプライベート感が高まっていく。敷地の奥行き15ｍの最奥部に設置されたのは、既成品の物置。扉のみガラス戸に取り替えた中には夫の工具棚や本棚、机が置かれ、書斎のようになっている。1階のヴォイド全体は、ご主人が客人をもてなす場としてとらえることもできるだろう。もちろん、奥さまも含めて気兼ねなく訪問客に対応できる場があることはうれしいだろうし、子どもが大きくなるにつれて、ここは子ども同士で集う遊び場のひとつとなるにちがいない。「家にとってよいことを考えていくと結果的に街もよくなり、よい循環を生む」という増田さんと大坪さん。適度に囲われ、かつ街に接続した空間は、滞在する人に不思議な居心地のよさをもたらす。

## 親しい客は2階に通される

物置の上にかかる階段を上っていくと、2階の玄関に至る。洗面台と折り畳みの天板が仕込まれたカウンター付き収納が中央に設置され、周囲の床にはFRP防水が施されている。家の中まで防水面が引き込まれているのは、1階のヴォイドが続いている余韻を残すため。また、この玄関でも来訪者の対応を行えるようにするためだ。

家に招かれた客はダイニングキッチンを通り、道路側のリビングに造り付けられたソファに座る。大人数が来て食事をする場合は、ここに組み立てテーブルを出し、ダイニングとしても機能する。「建主が抱くイメージを共有しながら、シークエンスのなかで見立てるように部屋をつくっていった」と増田さん。普段、インテリアの設計を仕事にしている建主は、自分たちの持ち物に合わせて収納や家具を詳細に検討し、増田さんと大坪さんはそれに応えながら空間に融合させていった。「設計ではつねに、全体と部分の駆け引きが繰り返されました。身体的なスケールと建物を落ち着かせて、生活に溶け込ませることを目指した」と増田さんは説明する。

客がトイレを使用する場合は3階へと案内されるが、プライベートな寝室と個室は引き戸で閉め切ることができる。ちなみに東側の寝室では、1階の階高を上げたことで視線が近隣の建物の屋根を越え、建主念願の見はらしのよい眺望が得られた。廊下と浴室にはトップライトが設けられて明るく、日中はとくに外を存分に感じられる。限られた面積のなかで街路に面した1階と2階の居住スペースを切り分け、外部の光と風を取り込む手法は、町家の構成を思い起こさせるものである。

増田さんと大坪さんがこれまで手がけた「躯体の窓」(2013)や「リビングプール」(14)などは、内外や部位ごとの境界に注力して設計した様子がうかがえる。この家では街もひっくるめながら公私の境界を立体的にとらえたことで、家族と客、家族と街との関係を豊かに広げるものとなっている。

Special Feature

Designing Floor Plans for Visitors

1F

住まい手の子どもとその友だち。1階の開けたスペースは、子どもたちにとっての遊び場にもなる。

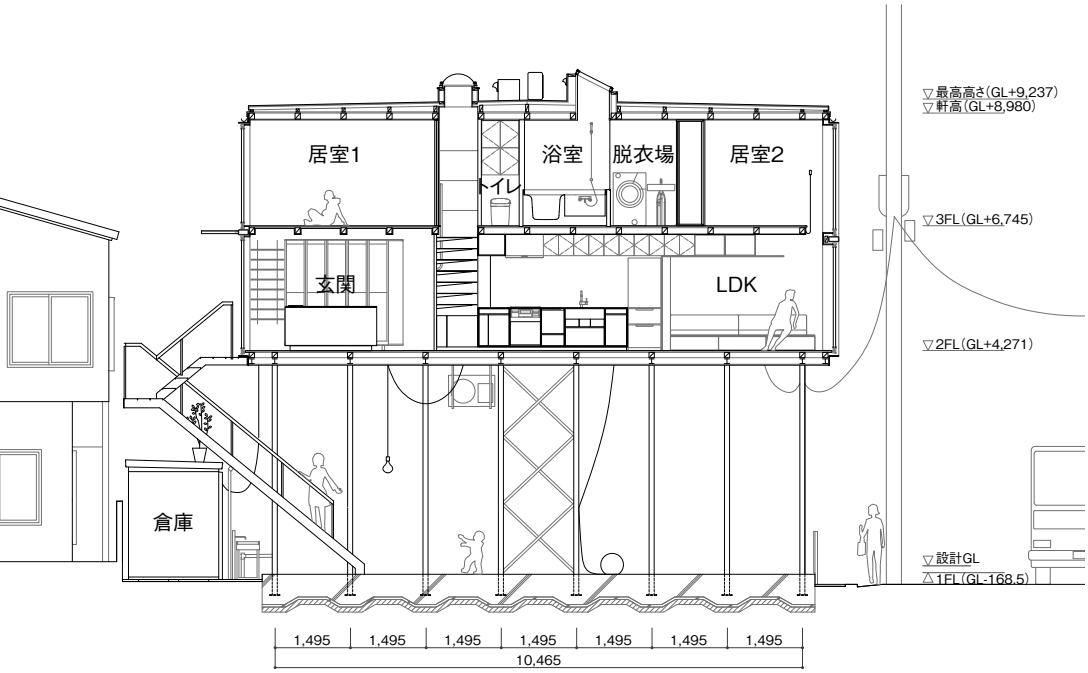
1階に壁がないため、隣家の壁が露出。隣家とのあいだにある配管をメンテナンスしやすい。

1F

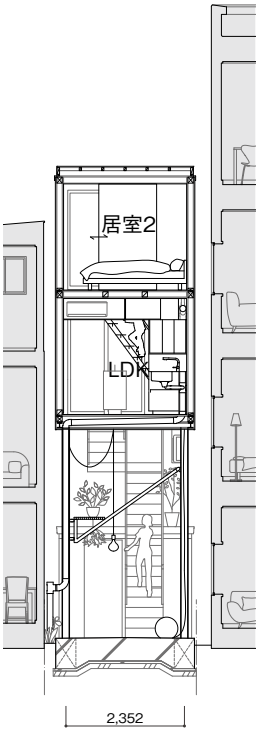
# 断面図　1/150

0　1　2m

## 長手




## 短手



>>>

写真上／3階の居室1から北東側を見る。周囲の軒高よりも3階のフロアレベルのほうが高く、隣家に眺望をさえぎられない。中／3階の廊下。隣家に挟まれた細長い敷地のため、トップライトから光を取り入れている。下／1階から2階の玄関に至る階段。階段の下には倉庫。書斎としても使われている。

Case Study 4

周囲の街並み。目の前にスーパーがあり、人通りの多い商店街。

# 「街の家」

| 建築概要 | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども1人 |
| 設計 | 増田信吾+大坪克亘 |
| 構造設計 | 平岩構造計画 |
| 構造 | 鉄骨造、一部木造 |
| 施工 | ダブルボックス |
| 階数 | 地上3階 |
| 敷地面積 | 43.89㎡ |
| 建築面積 | 34.28㎡ |
| 延床面積 | 87.46㎡ |
| 設計期間 | 2017年3月〜12月 |
| 工事期間 | 2018年1月〜9月 |
| | (12月に一部改修) |

| おもな外部仕上げ | |
|---|---|
| 屋根 | シート防水 t=1.5㎜ |
| 壁 | 窯業系サイディング t=16㎜ |
| 開口部 | アルミサッシ |
| 外構 | コンクリート洗い出し仕上げ |

| おもな内部仕上げ | |
|---|---|
| 床 | インテリアラーチ t=12㎜、 |
| | FRP防水 t=3㎜(玄関)、 |
| | タイルカーペット t=6㎜(居室1・2) |
| 壁 | PB t=15㎜ AEP、 |
| | 構造用合板 t=12㎜ WAX |
| 天井 | 強化PB t=15㎜ AEP |

2F

2階の玄関から、LDKを見通す。親しい友人を2階に招くことがあるため、玄関を広くしている。玄関脇の水栓で、帰宅後、すぐに手洗いができる。


## 増田信吾
Masuda Shingo

(左) ますだ・しんご／1982年東京都生まれ。2007年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。07年増田信吾+大坪克亘を共同で設立。

## 大坪克亘
Otsubo Katsuhisa

(右) おおつぼ・かつひさ／1983年埼玉県生まれ。2007年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。07年増田信吾+大坪克亘を共同で設立。

おもな作品=「ウチミチニワマチ」(09)、「躯体の窓」(13)、「リビングプール」(14)。

# 旅のバスルーム

文・スケッチ　浦 一也

## ド&コ ホテル ウィーン

オーストリア・ウィーン

## 「溶ける」寸前のバスルーム

いささか旧聞に属するが、かのハンス・ホライン（＊1）がウィーンの中心にある世界遺産シュテファン大聖堂前につくった商業施設「ハース・ハウス」（1990）の一部が、2006年以降このようなホテルになっている。外は相変わらずものすごい人出だが、ホテルとしてこんなにわかりやすい立地はない。

ホラインのような「かつて前衛」の建築がいまだに陳腐化しないのは、素材がリッチなものを使っているからではないかと思われる。時代は違うがウィーン市内のアドルフ・ロース（＊2）設計の「ロースハウス」（1911）などを見てもそれを感じる。いつの世もコンテンポラリーなものは素材が本物でリッチなものでなければならないという所以。ポストモダンでもミニマリスムでも安普請は短命なのだ。

基準階は円の一部を含んだ変形平面だからゲストルームにすると扇を半分たたんだような形となり、32㎡という部屋の奥行きは10m近くにおよぶ。部屋の入口近くには巨大な鏡があって狭さを和らげるなど、そこかしこに工夫の跡が見える。

室内にレベル差があり、高いレベルには水まわりがあって床はライムストーン。低いほうにはベッドやパーラーがあってフローリング。改装だが床上配管ということもあるだろう。

この部屋の窓からも洗われて白くなったシュテファン大聖堂が見える。チェック・イン前に部屋からのビューを確認したい。窓にカーテンみたいなものを使いたくないとばかり、室内側に雨戸のようなパネルが付いていて左右連動して開閉する。バランサーが付いているのか軽い。

壁面や窓の膳板に黄色いスエードを多用しているのが珍しい。

ベッドサイドテーブルなどのテーブルトップは銀の「トレー」でできている。これは全館そうなのだ。おもしろいがサービス中にも見える。

シャワールームもトイレも透明ガラス張りで、外側にルーバーの折り畳み扉や引き戸がかろうじて付いているのだが、中がよく見えてしまう。私が主張する「バスルームはだんだん溶けていく」という途上の姿か。

ガラスは「透光不透視」ということもできるはずだが、ここは社会通念の変化のほうが早かったか透視可。バスルームからの眺望重視ということや部屋全体を広く見せ、またシャワーに替わることが多くなったということもあるだろう。

このホテルを経営するグループは市内でケータリング業務やいくつかのレストランを運営しているだけあって、上階にあるバーやレストランの味はなかなかのもの。いい席を予約したい。

扇型平面だったので実測にはちょっと時間がかかったがそれも終わった。

ウィーンは見るべきものがあって忙しい。さてオットー・ワグナーのアム・シュタインホーフ教会（＊3）とか、アルベルティーナ美術館（＊4）でも見に行くとするか。

白くなったシュテファン大聖堂が見える。

＊1　ハンス・ホライン（1934〜2014）：オーストリアの建築家。レイノルズ記念賞、プリツカー賞など受賞多数。主要作品に「ハース・ハウス」（1990）、「レッティ蠟燭店」（65）、「メンヘンプラトバッハ市立美術館」（65）など。

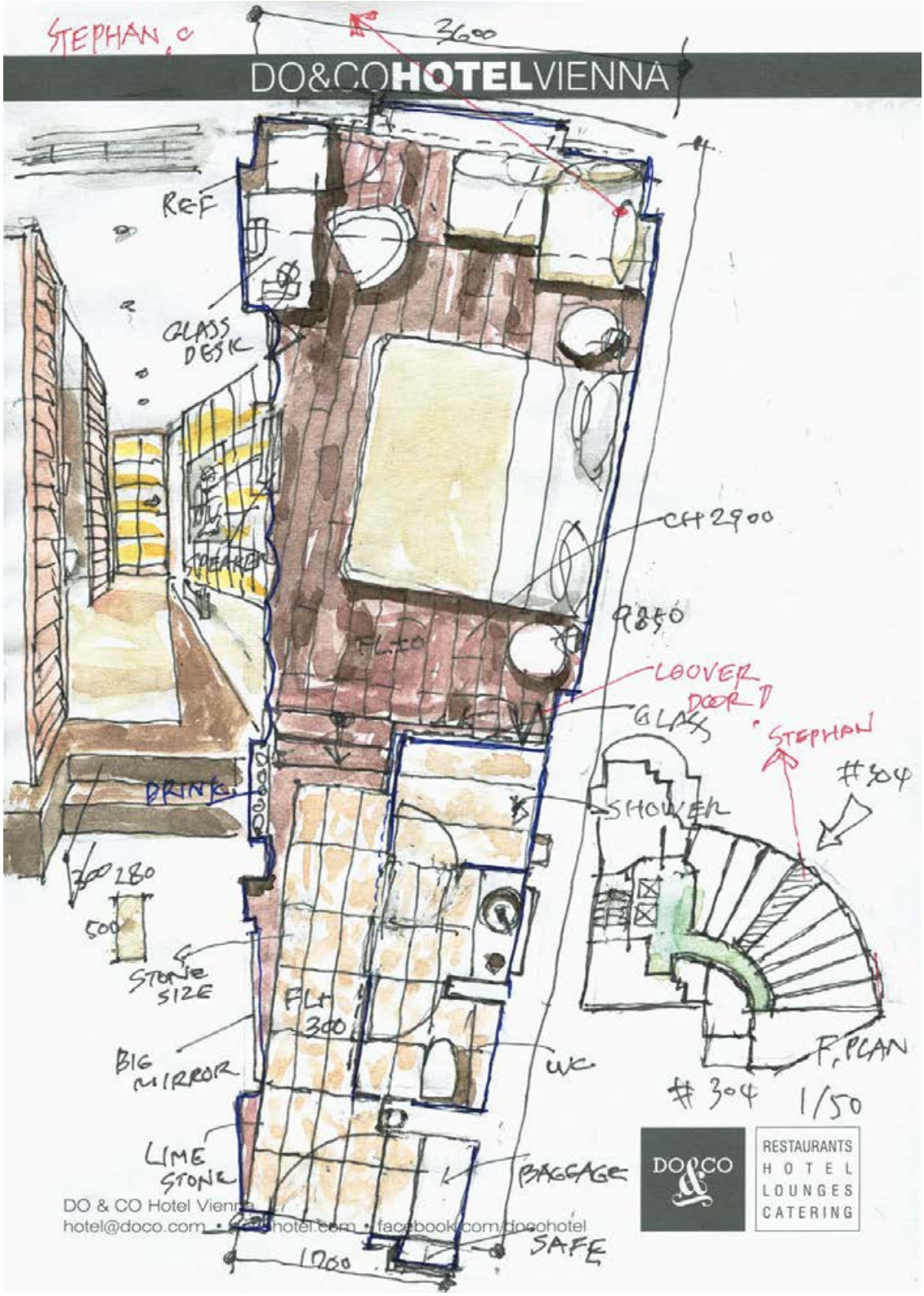
＊2　アドルフ・ロース（1870〜1933）：オーストリアの建築家。「装飾は罪悪である」という主張が波紋を呼んだ。作品に「ロースハウス」（1911）など。

＊3　アム・シュタインホーフ教会：オットー・ワグナー（1841〜1918）の設計。1907年竣工。ウィーンの中心部から6㎞ほど離れた山上にある。精神科病院の礼拝堂としてつくられた。正面には彫像が並び、内部は白色と金色を多用した華麗なもの。

＊4　アルベルティーナ美術館：世界有数のグラフィック・コレクションで知られ、デューラーの「野兎」やモネ、クリムトの絵画などのコレクションがある。

ナイトテーブルとして使われている銀のトレー。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームⅡ』（光文社）がある。




チーズを
切ったような
ゲストルーム
平面。

Text & Sketch by Ura Kazuya

DO&CO HOTEL VIENNA

Add／Stephansplatz 12, Haas Haus 1010 Wien, Austria
Phone／+43 1 24188
URL／https://www.docohotel.com

# ル・コルビュジエの先へ

## O邸　設計／吉阪隆正

Yoshizaka Takamasa × Fujimori Terunobu

1

一見するとただの家だが、よく見ると、十字形の立面といい、右手の前庭の高すぎる土盛りといい、普通ではない。

連載

# 現代住宅併走

第四十三回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後 均
（吉阪隆正のポートレイトを除く）

# 現代住宅併走

Yoshizaka Takamasa × Fujimori Terunobu

住宅としての内容もデザインも不明のまま〈O邸〉を訪れてみようと思ったのは、手がけたのが吉阪隆正だったからだ。

日本近代を専門とする建築史家として今和次郎に発し吉阪へと続く思想の流れにかねて心を寄せてきたし、27年前、45の齢で建築家としてデビューした折も、吉阪の文に突破口を開いてもらっている。

地下鉄を降りて地上に出てビル群の裏側の住宅地に入るが、それらしいのが見当たらないからもう一度歩きなおして、やっと建築家の家らしいのが目に入った。庭側のファサードが十字架状というか、3階建ての2階部分だけを左右に突き出している。

ブザーを押すと、新しいオーナーが迎えてくれる。さっそく入手の事情をうかがうと、新聞広告に手頃なのがあったので不動産会社に問い合わせると、「老齢の建主が階段の上り下りが難しくなり、これまで2度売りに出したが、買い手が現れると決意が揺らぎ2度ダメになった。今度はもう引っ越したから大丈夫……」。

建主のOさんはこの家にただならぬ愛着をもっておられた。

Oさんは、吉阪の設計事務所〝U研〟の大黒柱であった大竹十一（いち）の早稲田大学時代の友人で、それで吉阪に設計を依頼している。吉阪に頼んだ建主は決まって強い愛着をもつが、吉阪の人柄によるものなのか作風によるものなのか。

新しい持ち主に案内されて1、2、3階とひととおり見ても、階段が家のスケールに比べ目立つほかは、構造も平面も形もとりとめがなく、取材者としては少し焦る。これまで訪れた吉阪作品のような強い個性は感じられず、反対にヘンな造りばかりが気になる。

たとえば、2階主室（居間、厨房、食堂）の窓まわりの納まりはどうだ。なぜか、窓の上端が上階の梁（壁）の下に納まらず、上階の壁が窓枠の外側に間隔を置いて少し垂れているではないか。こんな納まりは初見。

窓の下のほうもヘンで、窓台にあたる位置には水平に大きな木材が走っているし、その下の壁にも太い大きい木の出っ張りが走っている。飾り棚というが、ここへ何を飾れというのか。窓の外側の窓台的位置にはパイプが並ぶが、ここに植木鉢でも置こうというのか。

窓まわりのあまりな異常さを外から確かめようと一旦外に出て眺めてみると、謎めいた内観と反対にしごくあっさり納まっている。十字架状の平坦な面が立ち上がり、柱と梁は面の内側に隠れ、面から少し引っ込んでガラス窓がはまるだけ。十字架状でなければ建築家の手になるとは気づかない。

普通の柱と梁の組み合わせからなるラーメン構造のように外からは見えるのに、なぜ室内からは窓の外側に壁が小さく垂れていたのか理解できない。

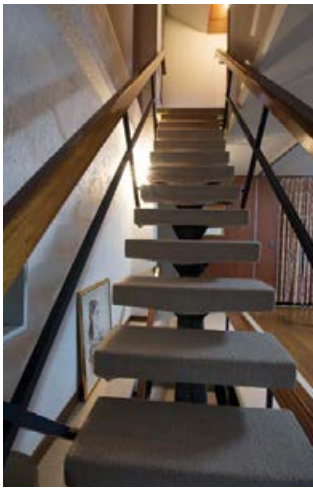
謎は遅れて現場に到着したU研出身の齊藤祐子さんに聞いて解ける。齊藤さんが、早稲田の建築の1年生だったときの最初の課題がO邸のパースだった。

造は純粋なラーメンではなく、梁間方向は普通の四角な梁が入るが桁方向は梁に重ねて壁梁（かべばり）形式をとり、荷重を受ける壁の背丈を高くするために窓枠の下まで出てしまったのである。

そんなヘンなことをした原因は2階の左右への出っ張り部分にあり、出っ張りを壁梁で支えるためだった。普通なら片持梁で支えるのをわざわざ壁梁にした理由は、4本柱により生まれたラーメン構造の外に別に出っ張り部分が付加したことを構造としても表現したかったからだという。ヘンな構造をちゃんと理解することができた。2階をわざわざ張り出したのは、ル・コルビュジエのピロティにならったにちがいない。

中心の4本柱のラーメン部分はル・コルビュジエのドミノを意識しているとすると、ドミノ

2



3

4

2／窓の外側に3階からの壁が垂れて見えるという謎の納まり。3／階段は独立し一気に上がる。4／窓の外の手すりも謎の造りを見せる。

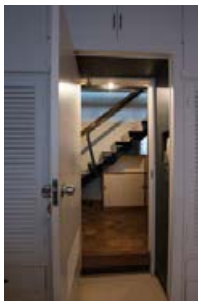
5 2階主室より階段を見る。

6 階段をこれほど強調する住宅も珍しい。空間の上昇感を強調したかったのか、あるいは階段室こそこの家の勘所と考えたのか。バウハウス系のモダニズムにはないル・コルビュジエ系モダニズムならではの造り。

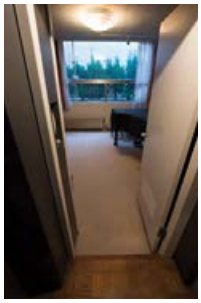
7 2階主室の全景。

8

9



10



11

8／1階の旧子ども室。庭より沈む。9／旧子ども室より廊下を見る。10／廊下より旧子ども室を見る。11／台の下に、沈んだ旧子ども室から屋外に出るための足掛け。

# 現代住宅併走

Yoshizaka Takamasa × Fujimori Terunobu

にピロティを組み込もうというのがこの家の意図だったのではないか。ル・コルビュジエはまずドミノ・システムを、遅れてピロティ形式を発表しているが、吉阪はふたつの一体化をこの家で試みた。しかし、ふたつを一緒に入れるにはこの家は小さすぎて随所に無理がいったのではないか。この構造に近い例としては「吉阪自邸」(1955)や国分寺の「十河邸」(56)などが知られている。

吉阪の造形的資質に合っていたのはマッシブさを可能にする壁構造にちがいないが、その一方で、ラーメン構造の「広島ピースセンター」(55)と「香川県庁舎」(58)で世界をうならせた丹下健三とは別のラーメン構造のあり方を求めて自分なりのラーメン構造を試みていたのかもしれない。

最初にざっと眺めたときから気になっていたもうひとつのヘンな造りにも触れておこう。

1階は1室からなり、当初は子ども室で今はピアノ練習室になっているが、なんと床レベルが玄関より低く、1尺(約30㎝)ほど沈んで入る。沈むだけでも意図不明なのに、窓から南の庭を眺めると地面が盛土のせいで上がり、沈下が強調されている。土中への沈下がきわめて意識的になされたのは、外に出るために小さなステップが左手の壁の途中に取り付けられていることからも明らかだろう。

例のない半ば地中に沈む部屋は72歳を迎えたばかりの建築史家の脳を強く揺さぶり、縄文時代の竪穴住居を浮かび上がらせる。もうひとつ以前に取り上げた「三澤邸」(未完／『TOTO通信』2016年新春号)も浮かんできた。

吉阪隆正は、ル・コルビュジエの奥にというか先に、土と大地を看取していたのかもしれない。

12

3階は両親の和室であった。写真では見えないが、外観の屋根が和風の軒先になっているのはそのため。

O's Residence

# O邸

| 建築概要 | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 設計 | 吉阪隆正／U研究室 |
| 敷地面積 | 126.959㎡ |
| 建築面積 | 72.04㎡ |
| 延床面積 | 137.11㎡ |
| 階数 | 地上3階 |
| 構造 | 鉄筋コンクリート造 |
| 竣工年 | 1973年 |
| 図面提供 | 文化庁 |
| | 国立近現代建築資料館 |

## 吉阪隆正

よしざか・たかまさ／1917年東京都生まれ。少年時代を外交官であった父の任地ジュネーブで過ごす。帰国して早稲田大学に入り、今和次郎について民家を巡り、また、民家調査のため中国北方に出かける。戦後、ル・コルビュジエに学び、早稲田大学教授として、またU研究室のボスとして、多くの建築家を育てる。戦後の建築界では異例の視点とデザインで活躍したが、80年、63歳の若さで病没した。もしもっと生きていてくれたら、と惜しまれてならない。象設計集団は行動も設計も吉阪の流れを汲む。

Yoshizaka Takamasa

写真提供／U研究室

## 藤森照信

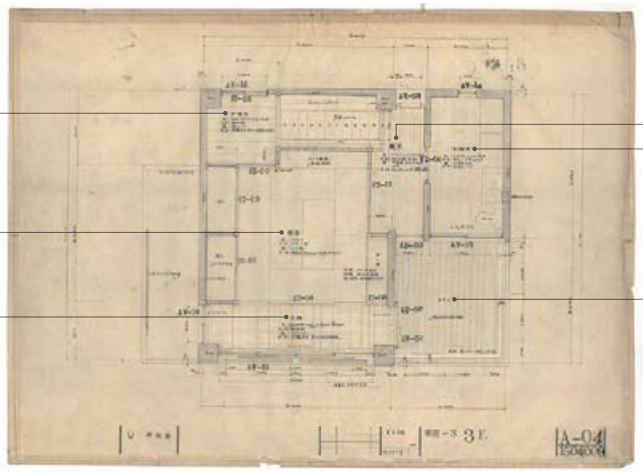
建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞。

Fujimori Terunobu

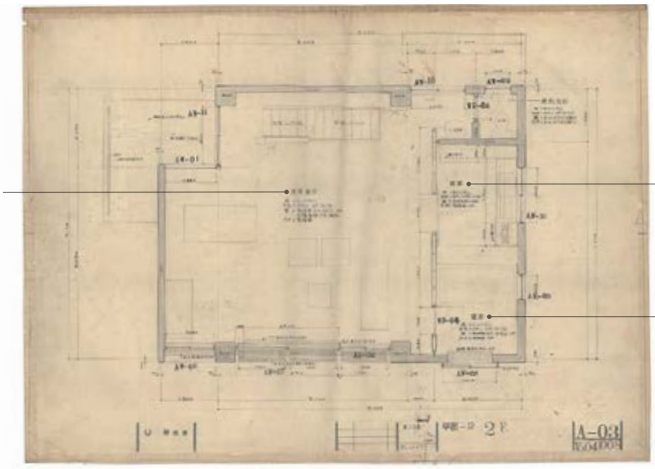
## 平面図

0　2　4m

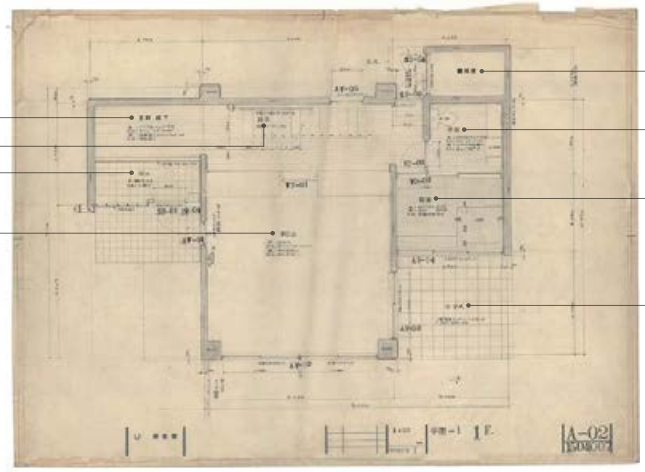
1/200




3F




2F

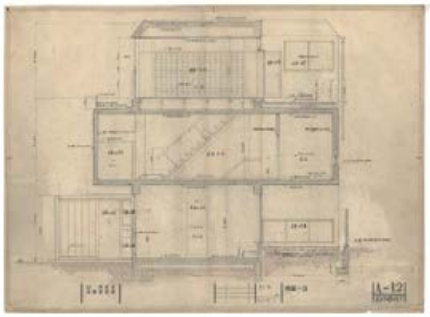



1F

## 断面図

0　2　4m

1/300



# 渋谷ストリーム

Shibuya Stream

## 渋谷の駅前再開発で新たな人の流れができた

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸（ポートレイトを除く）

複数の大規模開発が同時進行中の東京・渋谷駅周辺において、2018年9月、「渋谷ストリーム」がオープンした。

同施設は旧東急東横線渋谷駅とその線路跡地などに立つ商業、ホール、ホテル、オフィスからなる地上35階建ての大規模複合施設。これまで首都高速や国道246号線によって分断されていたエリアを駅周辺とつなぐべく、施設内の2階に旧駅舎や線路の記憶を残した半屋外の貫通通路「ストリーム・ライン」を設ける一方、駅に直結する地下2階から商業ゾーンの2階までがつながる縦動線「アーバン・コア」を設けた。また、敷地の前を流れる渋谷川を水辺空間として整備する事業も官民連携で行われた。広い意味で、まさに渋谷に新たな「ストリーム（流れ）」を生み出したといえるだろう。

本プロジェクトのデザインアーキテクツは小嶋一浩さんと赤松佳珠子さん率いるCAt（シーラカンスアンドアソシエイツ）、設計を東急設計コンサルタントが担当。渋谷の路地をイメージし、超高層の圧迫感を軽減したランダムなアルミパネル張りの外観や、縦動線を際立たせたストリーム・イエローのエスカレータのデザインは、16年に急逝した小嶋さんの発案だという。

### クリエイティブワーカーがターゲット

1～3階の商業ゾーンには約30店の飲食店やカフェが入る。事業主である東京急行電鉄の横田憲介さんによれば、メインターゲットは「クリエイティブワーカー」。女性客がメインの「渋谷ヒカリエ」などと比べると、溶融亜鉛メッキ鋼板やコンクリートといった工業材料の素材感を生かした内装や、随所にあけた「ポーラス」と呼ばれる孔によって街とダイレクトにつながった開放的な造りが特徴的だ。設計を手がけた東急設計コンサルタントの山口昭彦さんは「路地をつくって、店舗にもそこに自由に顔を出してもらおうと考えました」と振り返る。

トイレは2階に2カ所、3階に1カ所あり、今回取材したのは飲食店がまとまった3階のトイレ。

3階全体の共用部の内装は「インダストリアルな空気感を残しつつも、貫通通路があって人の往来が多い2階よりは静的で落ち着いた空間にしたいと考え、メインストリートから徐々に路地裏に入っていくような『隠れ家』を思わせる空間にしました」と山口さん。

実際に見学すると、壁に無造作に立てかけたように演出したパウダーコーナーの鏡、ランダムに配した天井照明、型板ガラスのようなレトロな素材を用いた男子トイレの間仕切りなど、全体の内装イメージと連動した落ち着きやレトロな雰囲気が感じられる。また、洗面コーナーやブースの側面に荷物がかけられるフックを個別に設けたり、赤ちゃん連れの母親だけでなく父親もおむつ交換ができるよう、男子トイレにもベビーシートを備えたブースを設けるなど、細かな配慮も怠りない。

→写真右／渋谷川から見た外観。左／2階商業ゾーン。「ストリーム・ライン」の通路沿いに顔を出すように店舗が並んでいる。

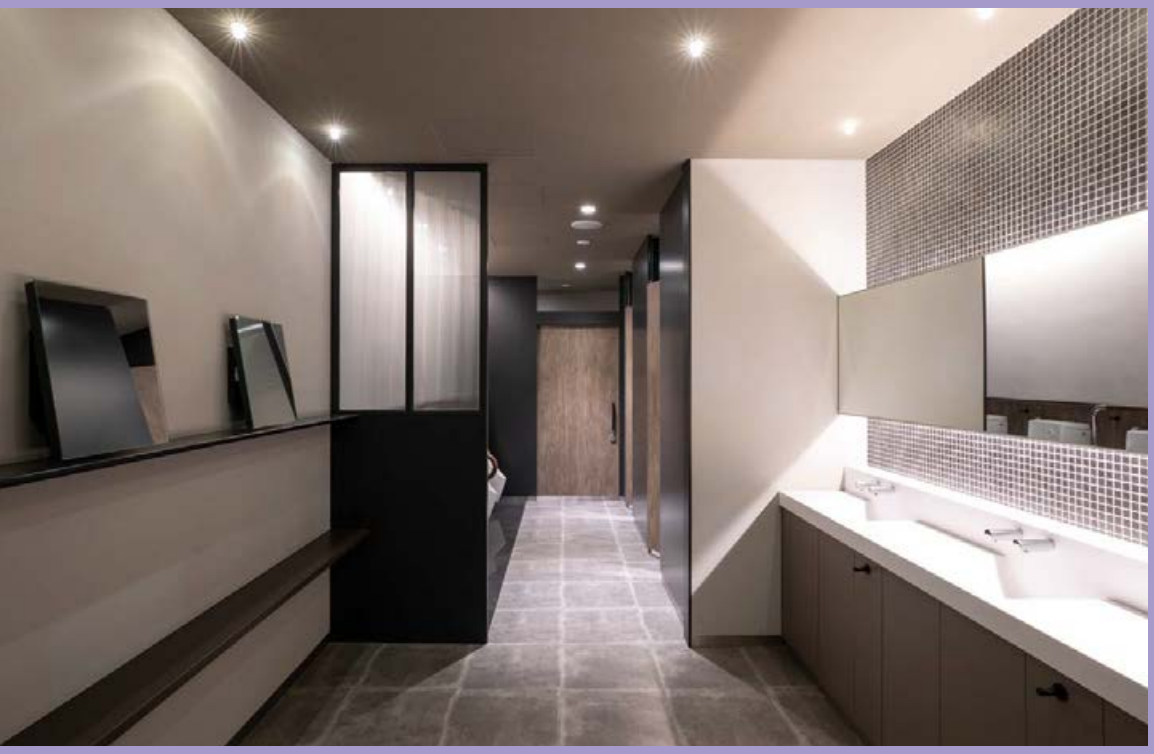
←2階の吹抜け空間「ポーラス」。通称ストリーム・イエローのエスカレータ。床には東急線の古レールを敷いている。

### 東急東横線の旧渋谷駅を模したオフィスロビー

次に、オフィスフロア。オフィスは5階にロビーがあり、ホテルを挟んで14階から上が基準階という構成。ロビーのデザインはコンペで選ばれたという、

# 商業 3F

## 男子トイレ



▲▲▲ 写真上／広めのブース。ベビーシート、ベビーチェア、フィッティングボードを完備し、子ども連れに配慮。左／洗面コーナーとドレッシングコーナー。間仕切りや照明でインダストリアルな雰囲気を演出。

## 女子トイレ

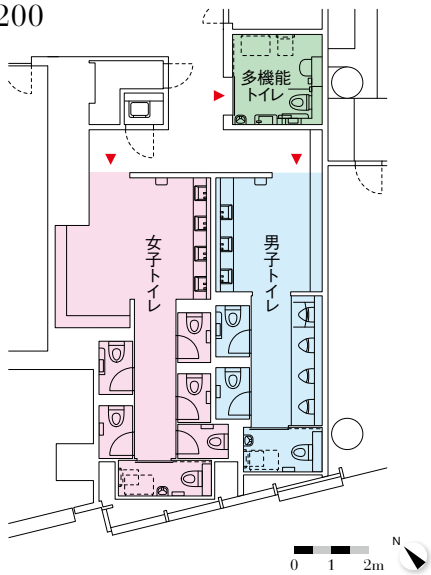
▲▲▲ 洗面コーナーとパウダーコーナー。奥のブースコーナーまでランダムに照明を配している。

## 多機能トイレ

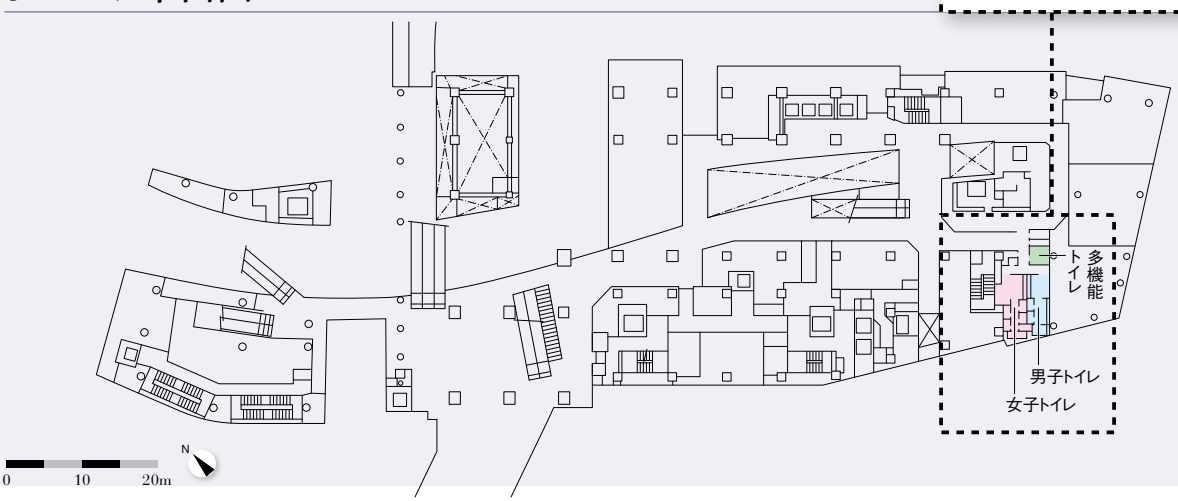
▲▲▲ 広々とした多機能トイレ。男女トイレより、さらに店舗へと近い場所に位置している。

### 3Fトイレ平面図

1/200

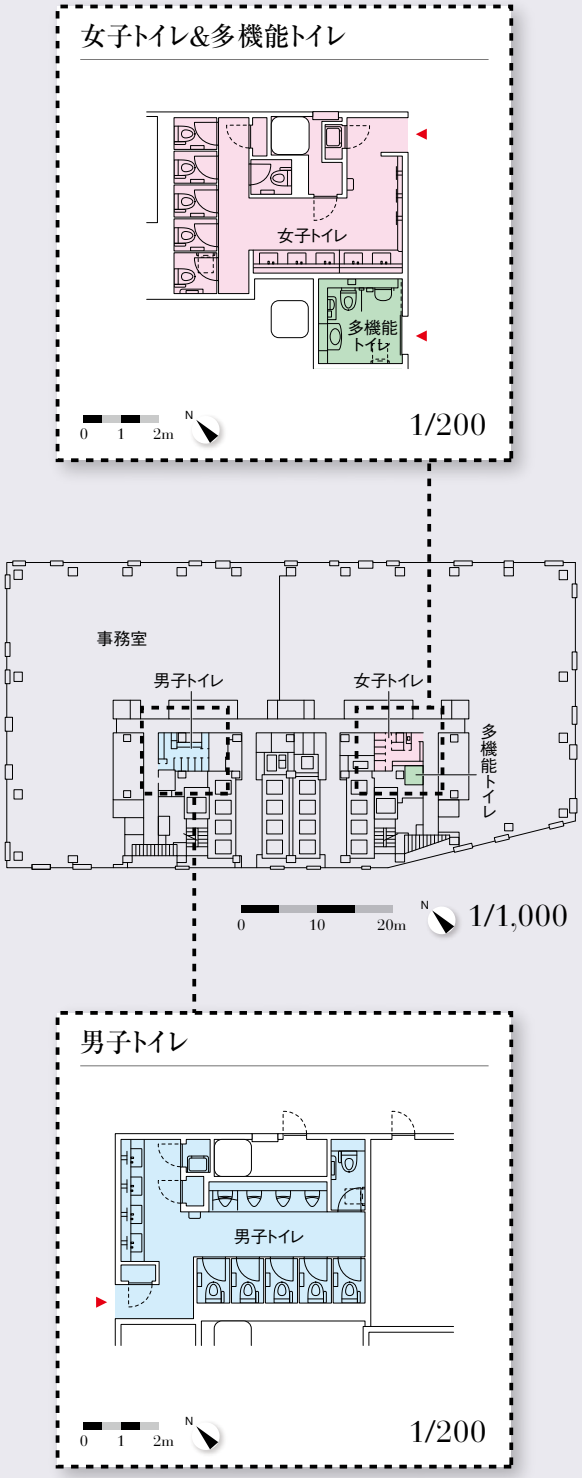



## 3Fフロア平面図



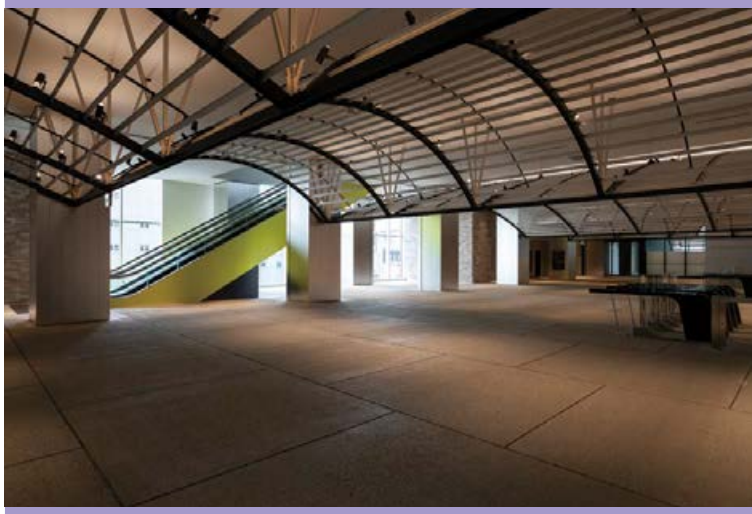

1/1,000

## 24Fフロア・トイレ平面図




## オフィス 5F

### ロビー内観



オフィスロビー。サポーズデザインオフィスが内装設計を担当。ヴォールト天井で旧東横線渋谷駅の駅舎を表現。

### ロビートイレ

ロビートイレの洗面コーナー。コンセプトは「ラフ・ラグジュアリー」。ミラーまわりは真鍮。

撮影／TOTO

谷尻誠さんと吉田愛さん率いるサポーズデザインオフィスによるもの。三方に開口部のある無柱の大空間に、あたかも旧東急東横線渋谷駅のカマボコ屋根がソフィスティケートされたかのような、金属格子のヴォールト天井がふわりとかかったインテリアは、いかにも東急電鉄が手がけるオフィスの顔にふさわしい。

「オフィスのロビーというよりは、かつての東横線渋谷駅の構内を抽象化して、できるだけ駅っぽくつくることを目指しました」と話すのは、サポーズデザインオフィスの濵谷明博さん。同社の荘司麻人さんも「いろいろな人があのロビーで行き交うような『ステーションホール』をイメージしました」と語る。

「サポーズデザインオフィスは2階の貫通通路や鉄道の記憶といった事業コンセプトを深く理解し、ストーリーのある、しっかりした提案をしてくれたので、その後、基準階について東急設計コンサルタントと設計を煮つめていくうえでも、全員の共通理解が得やすかったです」とは東急電鉄の横田さんの弁。

ロビーの脇にあるトイレもサポーズデザインオフィスの設計で、シンプルなベッセル式洗面器に真鍮のミラーを組み合わせたパウダーコーナーなど、ホテルのトイレと見まがう上質さが感じられる。濵谷さんによれば、

# オフィス 24F

## 男子トイレ

右手の小便器コーナーと奥の洗面コーナーの壁面は、外装を模したランダムなデザイン。

ブース。荷物を置きやすいように、便器背後に奥行きが深いスペースを設けている。

## 女子トイレ

洗面コーナー。奥のパウダーコーナーの壁面はタイル貼り。鏡まわりは間接照明で明るい。

## 多機能トイレ

女子トイレ脇に多機能トイレを設置。男女トイレと同様にモノトーンな空間に仕上げている。

## オフィス共用部

エレベータホール。黒が基調のオフィス共用部のデザインが、トイレ空間にも踏襲されている。

写真提供／渋谷ストリーム

ロビー全体のデザインコンセプトのひとつが「ラフ・ラグジュアリー」で、粗い仕上げの床といったラフな空間をベースにしながらも、奥へ進むにつれて落ち着きや高級感が感じられる空間づくりを意識したそうだ。

一方、オフィス基準階のトイレは、黒を基調にした共用部のデザインを踏襲し、黒い空間の中に白い設備機器が浮かび上がる、シンプルでモノトーンな空間。男子トイレの洗面・小便器コーナーの壁面は、外装のランダムラインを模したデザインで雰囲気を変えている。

ちなみに、大便器ブースは使用していない場合、扉が15度開いた状態で止まる仕様。これは便器が丸見えになるのを避け、なおかつ手前から見た際にあいているブースがひとめでわかるように配慮したもの。最初に基準階がこの仕様で決定したため、商業ゾーンなど、ほかのトイレも同じ考えで統一したという。

## ライブハウスにもビジネス利用にも調和するトイレ

最後に、別棟の5階にあるホールのトイレを見学した。横田さんによれば、東急電鉄では渋谷エリアの開発において「エンタテイメントシティ」というコンセプトを掲げていることもあ

# ホール5F

## 女子トイレ

ブースコーナー。未使用ブースの扉は15度に開く。中が丸見えにならない工夫。

洗面コーナー。洗面器の下には荷物をかけるためのフックを設置。

## ホールロビー

4階ホールロビー。手前のエスカレータは商業フロアにつながる。

## 男子トイレ

小便器コーナーとブースコーナー。混雑緩和のため、通路幅を広く設計。

## 多機能トイレ

コンパクトだがベビーシートやベビーチェアを設置し、子ども連れに対応。

## ホール内観

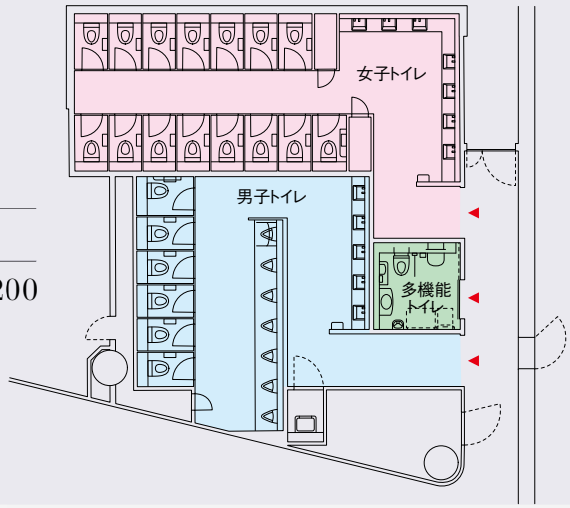
多目的に利用できるホール。スタンディング形式の場合は700人を収容。

写真提供／渋谷ストリーム

## 5Fトイレ平面図

0 1 2m N

1/200



り、ホールはその象徴的な用途のひとつだ。山口さんいわく、「このホールはライブなどエンターテインメント利用がおもに見込まれますが、展示会やセミナーといったビジネスユースも想定して検討を進めました」。デザインの検討では、エンターテインメント施設として、高揚感を醸成することをねらい、モノトーンで光沢のある素材を組み合わせて渋谷ストリーム独自の空間を目指したとのこと。

また、ライブやセミナーなどでは休憩時間にトイレ使用が集中するため、トイレに出る人と入る人、洗面コーナーを利用する人などが交錯しないよう、動線計画には気を配ったという。確かに、出入口付近や通路にはゆったりとした余裕が感じられる。

トイレの個数については、オフィスの基準階もホールも、空気調和・衛生工学会の基準のなかでも最も高い「レベル1」よりさらに1個多く設けている。商業ゾーンも「レベル1」の個数を備えることで、快適性に配慮している。今後、渋谷では新しい施設が続々とオープンする予定だが、先陣を切った渋谷ヒカリエや今回の渋谷ストリームが呼び水となって、ますます洗練されたトイレ空間が増えることを期待したい。

横田憲介
Yokota Kensuke
東京急行電鉄
都市創造本部
渋谷戦略事業部
開発二部
施設計画課
主事

山口昭彦
Yamaguchi Akihiko
東急設計
コンサルタント
建築設計本部
第4設計室
チーフマネジャー

濵谷明博
Hamatani Akihiro
SUPPOSE
DESIGN OFFICE
チーフディレクター

荘司麻人
Shoji Asato
SUPPOSE
DESIGN OFFICE

写真提供／渋谷ストリーム

# 渋谷ストリーム

Shibuya Stream

## 建築概要

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都渋谷区渋谷3-21-3 |
| 事業主 | 東京急行電鉄 |
| 主要用途 | 事務所、店舗、ホテル、ホール、駐車場など |
| 設計・監理 | 東急設計コンサルタント |
| デザインアーキテクツ | 小嶋一浩+赤松佳珠子／CAt |
| オフィスロビーアーキテクト | SUPPOSE DESIGN OFFICE |
| 施工 | 渋谷駅南街区プロジェクト新築工事共同企業体（東急建設・大林組） |
| 敷地面積 | 7,109.93㎡ |
| 建築面積 | 6,325.12㎡ |
| 延床面積 | 115,988.21㎡ |
| 階数 | 地上35階、地下4階 |
| 高さ | 約180m |
| 構造 | 鉄骨造 |
| 店舗数 | 約30店舗 |
| 工期 | 2015年5月～2018年8月 |

## おもなTOTO使用機器

**商業　3階**

● 男子トイレ／女子トイレ
壁掛壁排水大便器／ウォシュレットPS2　TCF5533YR／
ツインデッキカウンター（ボウル一体タイプ）／
ベビーシート　YKA25R／ベビーチェア　YKA15R／
フィッティングボード　YKA41
● 男子トイレ
壁掛自動洗浄小便器
● 多機能トイレ
コンパクト多機能トイレパック

**ホール　5階**

● 男子トイレ／女子トイレ
腰掛壁排水大便器／
ウォシュレットPS　TCF5503／
ツインデッキカウンター（ボウル一体タイプ）　MKWC
● 男子トイレ
壁掛自動洗浄小便器
● 多機能トイレ
多機能トイレユニット（特注）

**オフィス基準階　24階**

● 男子トイレ／女子トイレ
床置壁排水大便器／ウォシュレットP　TCF585YR／
フィッティングボード　YKA41／
ツインデッキカウンター（陶器タイプ）／
LED照明付鏡　EL80014
● 男子トイレ
壁掛自動洗浄小便器
● 多機能トイレ
多機能トイレユニット（特注）

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、
会社の性格、そして会社をリードする
人物の性格、マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

# 伊藤建設

ITOKEN

# 「自慢できるところ」を一緒に探す家づくり

代表取締役 伊藤 正則 さん

「お客さん、喜んでるか？」

ことあるごとに、社員にはそう声かけしているという伊藤正則さん。「お客さんが喜んでくれれば、また次の出会いにつながるから」と笑い話にして冗談めかすが、仕事とクライアントへの誠実さがにじみ出ている。

## 製材から行う一貫生産で人気に

伊藤建設を立ち上げたのは、伊藤さんの父・伊藤寅雄さん。もともとは農家で、独学で家づくりを学んだ寅雄さんが伊藤建設を設立したのは1965年というから、すでに50年以上の歴史を刻んでいる。

活動の中心は仙台だが、設立の地である登米市には今も本社とともに工場があり、大きな製材機が置かれている。近年ではなかなか手に入らない青森ヒバの原木を購入し、製材して家を建てる寅雄さんの一貫生産体制は、規格にとらわれない梁や柱が可能で、9mの梁を架けわたす大空間などが人気を呼んだ。

幼少期をそんな環境で過ごした伊藤さんの中学・高校時代のアルバイトは、あたりまえのように現場作業。ポンプ車がない現場の基礎コンクリートを手押しの一輪車で運んだりして汗を流し、やがて大学で建築を学んだ。卒業後、一時建築を離れるも、30歳で伊藤建設に入社。時代の変化のなかで苦戦する会社の立て直しに奔走することになる。

## 自然素材を中心に時代に合わせたラインナップ

現在の伊藤建設の商品ラインナップは4種類。在来軸組工法のほか、通気断熱WB（ダブルブレス）工法と呼ばれるもの、いち早く採用したZEH（ゼロエネルギーハウス）仕様、さらに経済的な2×4工法の4つで、いずれも自然素材の採用を基本とする。

通気断熱WB工法は、形状記憶のダンパーを用いて通気口を自動開閉し、冬暖かく、夏涼しい状態をつくり出すとともに、透湿性の高い内壁とすることで、結露の発生を抑制し、快適な室内環境を実現する。十分な自然換気は、とくに化学物質過敏症などアレルギー体質の人には有効で、実際、しばらく伊藤建設のモデルハウスにいることで充血していた目が治ったという人もいたそうだ。

気密性をより高めることが求められる近年は、エアコンで床下から暖める床下暖房も推奨する。ほかにも、ダクトレス全熱交換型換気システムや制震装置の導入など、自然素材を生かしながら、安心して暮らすための技術的な追求は止まらない。

## 建主もつくり手も愛情をもって

「総合展示場に出展したことが、うちのひとつの転機になりました」

出展したのはおよそ10年前。そこにどういう家をつくるか、自分たちが住みたい家は何かを、あらためて検討した結果、自然素材、手づくりといったキーワードとともに「暖かい」というコンセプトにたどり着く。単に室温が高い、ということではない。暮らす人たちが、家族が、みんな心から安らげるほっこりとした心地いい家をつくろう、ということだろう。

その想いの現れが、まず1カ所は「自慢できるところをつくりましょう」という建主への提案だ。「ほら、ここを見てよ」と来た人に言いたくなるようなものを一緒に考えませんか、という問いかけは、自分のこだわりは何か、建主が積極的に家について考えるきっかけとなるだろう。

まわり道、寄り道をしながらの検討には時間がかかる。半年以上設計に時間を費やすことも

写真上／仙台市内の展示場「緑と風のガーデン」の1階洗面室。下／1階トイレ。

取材・文／市川幹朗　写真／山下恒徳

多いという。だが、建主が本気で考え、こだわりをもって建てるからこそ、家に愛着が湧き、暮らしも豊かになる。

伊藤建設のホームページに「家づくりに携わるすべての人たちが愛情を込めた家こそが本当に価値のある家だと信じています」という伊藤さんの一文がある。この「すべての人」には建主家族も含まれるにちがいない。真剣に、愛情をもって自分たちの家づくりを考えてください。私たちが誠心誠意、愛情をもって家を建てるから。伊藤建設の家づくりからは、そんな声が聞こえてくる。

## お客さんを含め家づくりに携わる全員が愛情を込めた家こそ価値がある

Ito Masanori

代表取締役の伊藤正則さん。1階LDKにて。左のテーブルは父・寅雄さんの手づくり。

いとう・まさのり／1960年宮城県登米市生まれ。中学・高校時代から、先代の父のもとで現場仕事を手伝う。81年に日本大学生産工学部を卒業。89年に伊藤建設に入社。営業をはじめ、さまざまな業務を経験した後、2001年に代表取締役に就任。自然素材にこだわった家づくりを続けている。

ITOKEN

## 伊藤建設

●会社名
㈱伊藤建設
●本社所在地
宮城県登米市豊里町新田町95
●電話
0225-76-4542
●代表取締役
伊藤正則
●会社設立
1965年
●従業員数
21人
●事業内容
建築の設計・施工、
分譲住宅の販売
●売上高
11億6,000万円（2018年9月期）
●URL
http://www.itoh-kensetsu.jp
●TOTO使用機器
・トイレ ネオレスト
・洗面所 CERA（造作）

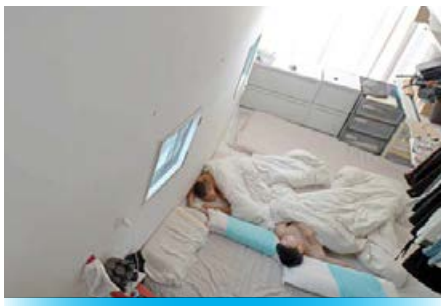
1階和室。建具や床まわりの細部までこだわっている。床柱はエンジュ。

2階寝室。大きな開口部で明るく広々とした造り。

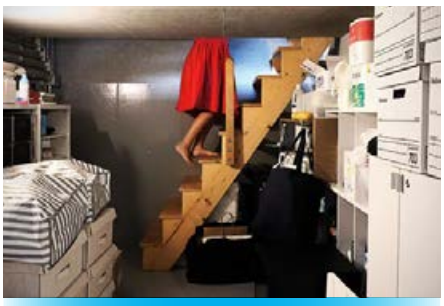
1階階段下の小スペース。伊藤さんの「この家で一番お気に入りの場所」。

# , and then

独自の繊細な作風で注目を集める建築家、中山英之氏。
場の条件を汲みとったうえで詩情あふれる建築を実現する、
中山氏の建築の魅力がどこから生まれてくるのかを紐解くために、
建築模型や図面だけでは伝えきれない、思考の道筋や、
実現した建築の質、完成後の時間の流れを映像で表現します。
本展では、ユニークな視点に裏打ちされた、中山氏の「思想」と「実験」を提示します。


©岡田栄造

film 3. O邸
監督／岡田栄造、空間現代　音楽／空間現代


©坂口セイン

film 4. 家と道
監督／坂口セイン　音楽／坂口セイン、中山順子

©岡本充男

film 5. 2004
監督／YU SORA　音楽／庄子 渉

## , and then

文／中山英之（建築家、東京藝術大学准教授）

この展覧会は、いくつかの映像からなります。過去に建ち、僕たち設計者の知らない時間を過ごしてきた建物たちを映したものが主です。なのでこれは、建築の展覧会というよりも建築のそれから／, and thenを眺める上映会、といったほうが正しいかもしれません。, and thenの時間に建築家はかかわることができないように、それぞれの映像も別人によって撮られ、編集されたものです。だからこれは、ばらばらなイメージの並んだ小さな映画祭のような展覧会、ということもできるかもしれません。けれども、映画が時に私たちにとっての現実をそれ以上に語ることがあるように、会期中だけ現れるこの小さな映画館が、現実の敷地ともうひとつ、ここだけの, and thenを訪ねる経験になればいいなと思います。

### 映画、建築

どうして映画なのか、それにはもうひとつ理由があります。（ドキュメンタリーという分野もありますが）本質的に映画というのはつくりものです。そして僕たち建築家もまた、つくりものをつくることしかできません。長年にわたって手を入れられ続けたすばらしい民家があったとして、ではそれを再現すればすばらしい建築になるのかといえば、そんなことはありません。それでも私たちは映画を観るとしばしそのことを忘れて、そしてよくこんなふうに言うのです。「リアルだった」。このリアルという言葉には、「再現性」と「現実性」という、ふたつの異なる意味が混ざっています。前者は恐竜や、ローマの騎馬戦や、別れ際の涙だったりします。リアルなシーン、リアルな演技。こちらはわかりやすいですよね。では後者の「現実性」とはなんでしょう。これは、映画のなかでなく、私たちの内側にあるも

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY · MA

# 次回予告

## アーキテクテン・デ・ヴィルダー・ヴィンク・タユー展

2018年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展において、新進気鋭の建築家へ送られる銀獅子賞を受賞し、世界的にも注目を集めるベルギーの建築家ユニット、アーキテクテン・デ・ヴィルダー・ヴィンク・タユーの日本で初めての展覧会を開催します。

会期
9月13日(金)〜11月24日(日)
講演会
9月13日(金)／イイノホール

TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00〜18:00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線・都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

https://jp.toto.com/gallerma

TOTO GALLERY・MA

会期／2019年5月23日(木)〜8月4日(日)

©加藤孝司

# 中山英之
Nakayama Hideyuki

なかやま・ひでゆき／1972年福岡県生まれ。98年東京藝術大学建築学科卒業。2000年同大学大学院修士課程修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、07年に中山英之建築設計事務所を設立。14年より東京藝術大学准教授。おもな作品に「2004」(長野県、06年)、「O邸」(京都府、09年)、「Yビル」(東京都、09年)、「Y邸」(広島県、12年)、「石の島の石」(香川県、16年)、「弦と弧」(東京都、17年)、「mitosaya薬草園蒸留所」(千葉県、18年)など。おもな著書に『中山英之／スケッチング』(新宿書房、10年)、『中山英之|1/1000000000』(LIXIL出版、18年)など。おもな受賞に、SD Review 2004 鹿島賞(04年)、第23回吉岡賞(07年)、Red Dot Design Award(14年)など。進行中のプロジェクトに「Printmaking Studio/ Frans Masereel Centrum」(ベルギー、19年予定)、「Residential and Daily Care Centre in Wommelgem」(ベルギー、21年予定、以上2作品はLISTと協同)など。

©中山英之建築設計事務所
film 1. 弦と弧
監督／八方椎太

©伊丹豪
film 2. mitosaya 薬草園蒸留所
カメラ／江口宏志　企画／川村真司

## 中山英之講演会「, and then」

| | |
|---|---|
| 日時 | 2019年5月30日(木)18:30〜20:30 |
| 会場 | イイノホール(東京都千代田区内幸町2-1-1飯野ビルディング4F) |
| 定員 | 500名、参加無料 |
| 参加方法 | 事前申し込み制<br>TOTOギャラリー・間ウェブサイトよりお申し込みください。 |
| 申し込み期間 | 4月24日(水)まで |

のです。映画を観ることが、自分や、自分を超えた過去の経験や記憶の束に働きかけて、結果湧き上がってくるものが見せる、それはもうひとつの現実のようなものです。おもしろいのは現実性というリアルが、時に再現性のリアルとは無関係なことです。たとえば主人公が歌い踊るミュージカル映画など、はじめから映画の側でつくりものであることをこれでもかと告白しているようなものですから。けれども時に、私たちはそんなミュージカル映画に「リアル」を見るのです。

僕たちも、自分たちにしかできない方法で、何かの再現ではない建築をつくりたい。つくりものではあるけれど、そこに生きられる生が、その内から立ち上げる現実性のようなものを、僕たちも目指しているのだと思います。だからこれは、映画というつくりものがそれゆえに見せる現実性に憧れた建築が、それから／, and thenの現実を生きる、その映画を観る展覧会、でもあります。

もうひとつ。映像には始まりと終わりがあるので、好きなときに行き、自分のペースで会場をまわれる展覧会とは、ちょっぴり相性がよくないかもしれません。そんな意味でも展覧会には、できれば映画館に出かけるような気分で来てもらえたらうれしいです。もちろん、映っている建築についてなら僕たちも、カーテンの開閉機構の仕組みから、影響を受けた映画監督の言葉まで、すべてを知っています。ギャラリーが映画館なら、それらが展示されたロビーも忘れずに用意したいと思います。

# News File

## TOTOの最新情報

TOTO News 4

### TOTO出版ウェブサイトにて「TOTO出版コラム」を配信中です

TOTO出版ウェブサイトでは、より書籍に親しんでいただくことを目的としたコンテンツ、「TOTO出版コラム」を配信中です。制作秘話や書籍未収録写真、関連イベントのレビューなど、TOTO出版ならではの情報発信にご期待ください。
現在、世界中の「普通の」家族の暮らしを撮り下ろしたロングセラー「地球家族シリーズ」著者へのインタビューと、2018年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館カタログ『建築の民族誌』関連コラムを連載中です。書籍とあわせて、ぜひお楽しみください。

下記のTOTO出版専用ウェブサイトURL、もしくは、二次元バーコードからご覧ください。
https://jp.toto.com/publishing/bookplus/index.htm

TOTO News 3

### 世界最大規模の見本市「ISH2019」に出展しました

TOTOは3月にドイツで開催された「ISH2019」に出展しました。
トイレ空間の展示では「TOTO CLEANOVATION」と銘打ち、"CLEAN SYNERGY"(まいにちの清潔性のシナジー効果)として、きれい除菌水やセフィオンテクトなどの独自の技術を紹介。また、「TOTO RELAXOLORY」をテーマに浴槽・シャワー、「TOTO DESIGN」をテーマにデザインにこだわったグローバル水栓など、新商品を発表しました。
さらに「Life Anew NEXT」をスローガンに掲げ、IoTを活用した近未来の水まわりライフを提案。
デザイン・技術でお客さまのまいにちを豊かに新しくしていく"Life Anew"を世界に発信しました。

「ISH2019」のTOTOブース展示イメージ。

デリーのショールーム外観。

デリーのショールーム内の展示ゾーン。

TOTO News 2

### インド・デリーに直営ショールームを開設しました

TOTOのグループ会社・TOTO INDIA INDUSTRIES PVT. LTD.は、2月11日にインド初となる直営ショールームを同国首都のデリー連邦直轄地にオープンしました。アジア・オセアニア地域において、タイ・バンコク、ベトナム・ホーチミンに続く、3番目の直営ショールームとなります。
コーポレートメッセージ「Life Anew」(*)のもと、"今までとは「ちがう」価値を生み出し、世界の人々に期待を超える「まいにち」を届ける"ため、TOTOの高機能商品や技術展示を充実させた施設です。
成長著しいインド市場におけるTOTOブランドの認知拡大と、同市場における事業拡大を目指します。

*TOTOグループの世界共通のコーポレートメッセージ"あしたを、ちがう「まいにち」に。"の英語表記として、2017年10月に新設したもの。

TOTO News 1

### 成田国際空港にTOTOプロデュースのおもてなしトイレがオープンしました

「experience TOTO」の外観イメージ。

TOTOがプロデュースする、"おもてなし"を目指すトイレ「experience TOTO」が、4月3日、成田空港第1ターミナルビル南ウイング1階(到着ロビー・制限エリア外)にオープンしました。
訪日外国人に、"日本のきれいなトイレ文化"を入国して最初のトイレで体感していただくことを目的に開設しました。
ウォシュレットの操作リモコンは、TOTOが監修した「タブレットリモコン」を導入。多言語対応の機能説明を搭載し、訪日外国人にもわかりやすくご使用いただけます。なお、第2ターミナル出国エリアの「GALLERY TOTO」の大型パネル映像も更新しました。ぜひご覧ください。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

https://jp.toto.com/publishing

## 『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで
＊法人あての送付となります。

tel 093-563-2055

e-mail toto_tsushin@jlink-net.com

アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

### Bookshop TOTO 2F

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 |
| 電話 | 03(3402)1525 |
| 定休日 | 月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始 |

### TOTO出版 2F

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 |
| 電話 | 03(3402)7138 |

全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

### セラトレーディング B1・1F

| | |
|---|---|
| 所在地 | 東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル |
| 電話 | 03(3402)7134（東京ショールーム） |
| 定休日 | 月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 |

## TOTO出版のお知らせ

Book 1

### 『RCR Arquitectes Geography of Dreams ——RCRアーキテクツ 夢のジオグラフィー』

Present! P

**同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。**

スペイン・オロットで培った建築哲学をグローバルに展開し、プリツカー賞を受賞したRCRアーキテクツの作品集。彼らの軌跡をたどる主要7作品と、プリツカー賞受賞後に発足した生涯をかけて育てていく生きた建築プロジェクト「ラ・ヴィラ」の全貌を初紹介。建築をつくることを「夢を見ること」と定義するRCRの、これまでとこれからの夢をまとめた一冊。

| | |
|---|---|
| 著者 | RCRアーキテクツ |
| 定価 | 4,600円+税 |
| 体裁 | 190×250㎜、ソフトカバー、400ページ |
| 発行 | 2019年1月 |

Book 2

### 『安藤忠雄の建築0 増補改訂版』

発想の過程、葛藤の過程こそが建築だ！
初版発行より9年、最新の11プロジェクトを追加し、1冊で72作品を紹介。
手描きスケッチ・図面をメインとした安藤建築の発想の過程がわかる作品集。膨大なスケッチに描かれた安藤のアイデアが、輻輳し反響しあいながら、やがて精緻な建築図面に結晶し、実現されていくプロセスをたどる。新たに、旅のスケッチ、50年にわたる建築年表も追加され、充実した内容となっている。

| | |
|---|---|
| 著者 | 安藤忠雄 |
| 定価 | 2,500円+税 |
| 体裁 | 190×250㎜、ソフトカバー、368ページ |
| 発行 | 2019年2月 |

## セラトレーディングのお知らせ

### 建築専門家さま向けにセラスペシャルメンバーシップ会員を募集中です！

海外の水まわり商品を取り扱うセラトレーディングならではの特典を、メンバーシップ会員の方にお届けします。会員登録は無料です。

特典 1 総合カタログの定期発送（新しいカタログ発行時）

特典 2 トレンドセミナー・イベントへ優先的にご案内

特典 3 商品情報や納入事例など水まわりコラムをメール配信

**そのほか会員限定メニューを随時拡大予定**

登録をご希望の方は、下記のセラトレーディングウェブサイトURL、もしくは、二次元バーコードにてご依頼ください。
https://www.cera.co.jp



**2019年度の『TOTO通信』は、2019年4月、7月、2020年1月に発行の予定です。**

TOTO通信 2019年 春号

TOTO通信 2019年 春号 第63巻・第2号 通巻521号
発行日：2019年4月1日 発行所：TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO

ウォシュレット一体形便器
ネオレスト AH/RH

台付シングル混合水栓
GMシリーズ
※上記商品は2019年度販売予定商品です。

壁掛RP便器＋ウォシュレットRX
〈販売エリア：欧州／北米／中国／アセアン〉

3 products
win
iF DESIGN AWARD 2019

DESIGN AWARD 2019

【iFデザイン賞2019受賞】

TOTO技術相談室 電話：0570-01-1010 受付時間：〈平日〉9:00～18:00 〈土曜日〉9:00～17:00（日・祝・夏期休暇・年末年始を除く）
建築専門家のための情報サイト COM-ET（コメット） http://www.com-et.com TOTOホームページ https://jp.toto.com
※商品詳細は、TOTOホームページをご覧ください

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（https://jp.toto.com）をご覧ください。

8234